

平木池遺跡発掘調査報告

1982年

広島県教育委員会
(財)広島県埋蔵文化財調査センター



例　　言

1. 本書は昭和55年7月8日から10月1日にわたって実施した広島大学統合移転地造成事業に伴う平木池遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は広島県教育委員会が地域振興整備公団から委託をうけて財団法人広島県埋蔵文化財調査センターと共同で実施した。
3. 出土遺物の整理・復元・実測・図面の製図等は発掘調査を担当した植田千佳雄、嶋田滋、三枝健二、伊藤実、佐々木直彦、福島政文が主にあたった。
4. 本書の執筆はIVのD. 石器の項を三枝が、他を植田が担当し、植田が編集した。
5. 遺構の番号は2ケタの一連番号で01～42まで付しており、遺構ごとに以下の略記号を冠している。

S B : 住居跡・建物跡 SK : 土塙 SD : 溝

6. 遺物の番号は3ケタの一連番号で001～167まで付している。
7. 本書に掲載した第1図は建設省国土地理院発行の2.5万分の1地形図を使用したものである。
8. 本書に掲載した遺物実測図の断面は、須恵器=黒、土師器=白ヌキで示している。また遺構実測図のアミ目は焼土である。

目 次

例 言

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の概要	4
IV. 遺構と遺物	7
A. 住居跡・建物跡	7
B. 土 塚	29
C. 溝	34
D. その他の遺物	34
V. ま と め	49

図版目次

- 図版1 遠景（西より）
遠景（南東より）
- 図版2 調査後全景（南より）
調査後全景（南東より）
- 図版3 調査後全景（東より）
S B03（南より）
- 図版4 S B04（西より）
S B04かまど断面（西より）
- 図版5 S B05（西より）
S B05（南東より）
- 図版6 S B05完掘後（南東より）
S B05かまど（南東より）
- 図版7 S B06・41, SK18（北東より）
S B07（南東より）
- 図版8 S B09～14・40, SK15・16・25（東より）
S B09・10・40（南より）
- 図版9 S B13・14・32・40, SK15・16（北東より）
S B21, SK20・22～24（北東より）
- 図版10 S B17・28・29（南西より）
S B17・28・29（南東より）
- 図版11 S B17・29断面（東より）
S B17断面（西より）
- 図版12 S B19, SK34, SD39（南より）
S B19かまど断面（南より）
- 図版13 S B26・27, SD39（東より）
S B26・27, SK38, SD39（南より）
- 図版14 S B30, SK35（南より）
SK38（南より）
- 図版15 出土遺物I
- 図版16 出土遺物II
- 図版17 出土遺物III
- 図版18 出土遺物IV
- 図版19 出土遺物V
- 図版20 出土遺物VI
- 図版21 出土遺物VII
- 図版22 出土遺物VIII

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図 (1 : 25,000, 清水原)	3
第2図	遺跡周辺地形図及びトレント配置図 (1 : 1,500)	4
第3図	土層断面図 (1 : 60)	5
第4図	造構配置図 (1 : 300)	折込
第5図	S B03・04実測図 (1 : 60)	8
第6図	S B04カマド実測図 (1 : 30)	9
第7図	S B05・06・41, SK18・42実測図 (1 : 60)	11
第8図	S B07実測図 (1 : 60)	13
第9図	S B09・10・13・14・40, SK15・16・25実測図 (1 : 60)	14
第10図	S B11・12・21, SK20・22～24実測図 (1 : 60)	16
第11図	S B17・28・29実測図 (1 : 60)	折込
第12図	S B19, SK34実測図 (1 : 60)	19
第13図	S B19カマド実測図 (1 : 30)	20
第14図	S B26・27実測図 (1 : 60)	22
第15図	S B26カマド実測図 (1 : 30)	23
第16図	S B30～32, SK35実測図 (1 : 60)	26
第17図	S B33実測図 (1 : 60)	28
第18図	S K01・02・08・36～38実測図 (1 : 40)	30
第19図	土器実測図I (1 : 3)	38
第20図	土器実測図II (1 : 3)	39
第21図	土器実測図III (1 : 3)	40
第22図	土器実測図IV (1 : 3)	41
第23図	土器実測図V (1 : 3)	42
第24図	土器実測図VI (1 : 3)	43
第25図	土器実測図VII (1 : 3)	44
第26図	土器実測図VIII (1 : 3)	45
第27図	石器実測図I (1 : 2)	46
第28図	石器実測図II (1 : 2)	47
第29図	石器・鉄器実測図 (1 : 2)	48

I. はじめに

県中央部を占める東広島市は、広島大学統合移転計画を軸として新しい学園都市づくりに乗出している。それは広島大学キャンパス用地の造成とともに周辺地域の整備、幹線道路網の拡充等広い範囲に及んでいる。こうしたことから「緑の台地」東広島市は大きな未来像を持ちながら変貌しようとしており、これらの開発事業に伴って埋蔵文化財に対してもその早急な対応が迫られる状況にある。

大学建設予定地内の埋蔵文化財の取扱いについては、すでに昭和48年以来広島大学当局と再三の協議をすすめ、その所在確認の分布調査は昭和53年以降広島大学文学部考古学研究室も参加しておこなわれた。今回の発掘調査は、確認された遺跡のうちキャンパス内アカデミック地区の造成に伴うものである。

アカデミック地区は、昭和53年度の広島大学考古学研究室の分布調査で須恵器や石器の散布が認められ、昭和54年6月、同研究室が試掘調査を実施した結果、掘立柱建物2棟や溝状遺構などが検出され、須恵器等が出土したことから大規模な古代宮衙遺構とみられた。しかし、遺跡の範囲など不明な点が多かったので、県教委は昭和54年12月、再度平木池遺跡の予備調査を行なった。この結果、竪穴式住居跡が検出されたが、この段階ではその数は少なく遺物も少量しか出土しなかったので、小規模な集落遺跡であると推定された。これを踏まえて、県教委、広島大学と、その当時土地を所有していた地域振興整備公団との三者が協議した結果、大学側の強い要請があり、昭和55年度に本調査を実施し記録保存をはかることとし、昭和54年9月と昭和55年3月広島大学事務局長から県教育長に宛、文書による発掘調査の依頼があった。

このような経過によって、本遺跡の発掘調査は昭和55年7月8日から約2か月の予定で、県教委と財団法人広島県埋蔵文化財調査センターによって開始された。しかし調査の進行につれて、予想外に遺構・遺物が検出され、さらに北半と西半に遺跡の範囲が広がることが判明したので、再び広島大学、地域振興整備公団と協議を行ない、発掘調査費用の増額および期間の延長を決定した。調査は冷夏・長雨にたたられたが、無事同年10月1日に終了した。

なお、発掘調査の実施にあたり、広島大学、地域振興整備公団、東広島市教育委員会、宮川忠孝氏やその他地元の多くの方々からひとかたならぬ御協力をいただいた。記して謝意を表したい。

II. 位置と環境

平木池遺跡は東広島市西条町下見に所在する。本遺跡を含む丘陵・山地部は西条盆地の中央よりに島状を呈しており、三ツ城古墳・鏡山城跡をはじめ貴重な遺跡が点在している地帯である。広大キャンパスもこの近くにつくられることになり、古代・中世を代表する構造物とともに並びたつことになる。本遺跡は鏡山と二神山の中間に位置し、東から西へ派生した丘陵頂部（標高249m）南側の緩傾斜面に立地しており、標高230～225mの間である。丘陵の傾斜は尾根に近いほうで15°前後、調査区北半で10°前後、調査区南半で4°である。遺跡の西側200mには北より南へ流れる椿畠川、南側30mには東より西へ流れる中山谷川があり、これらは合流し、黒瀬川へ流れ込む。中山谷川の沖積地は幅20m前後と狭いもので、それより北へ崖をなし比高差10m、傾斜45°で本遺跡に達する。調査区付近の微地形は表面観察では中央の南北がやや谷状を呈し、それをはさむように東西の両側が尾根部を形成しているが、全体的に等高線はほぼ東西を向く。

これより、周辺の遺跡について概観する。

旧石器・縄文時代としては縄文時代後期の土器が三ツ城古墳⁽¹⁾・龍王山南麓遺跡より出土したのみであったが、今回平木池遺跡より旧石器・縄文早期に比定し得る石器が発見できた。遺構に伴うものではなかったが、貴重な資料であり、今後、発掘例が増加するものと思われる。

弥生時代になると遺跡数も増加するが、後期のものが多く、遺構としてとらえられているのは鏡西谷遺跡・鏡千人塚遺跡などである。前者は弥生時代中期～後期の遺跡で、住居跡・土塁などが検出され、弥生土器・分銅形土製品などが出土している。その他に長者原遺跡・団子山遺跡・青谷遺跡・円城寺遺跡などがある。これらの遺跡は丘陵上に立地したものが多い。

古墳時代になると本遺跡より北西方2kmに所在する三ツ城古墳をはじめ、数多くの古墳が構築されている。三ツ城古墳は全長84m、高さ13mを測る県内最大の前方後円墳で、その内容から安芸国の首長の墓ともいえるものである。すくも塙古墳は全長58.5m、高さ7～8mの帆立貝式古墳である。その他、すくも塙第2号古墳、夫婦茶屋古墳、千野丸古墳群⁽²⁾、八幡山大池古墳⁽³⁾などがあり、これらはいずれも箱式石棺を内部主体としていた。またキャンパス内で本遺跡より南方500mには西ガガラ古墳があり、砂防工事の際、削平されているが、径15mの円墳で横穴式石室の奥壁や側壁が一部残存している。古墳に比して生活跡・生産跡はあまり確認されていない。まとまった規模のものとしては今回の平木池遺跡の集落跡が初見である。住居跡は丘陵斜面に立地しているため、斜面上方をコの字状に削平し水平な床面を造ったものが多く、溝、カマド、柱穴等を伴っている。その他、寺西小学校校庭遺跡から土師器が出土している。

奈良時代になると安芸国分寺跡、呉水源地周辺の窯跡群⁽⁴⁾、東ガガラ窯跡などがある。東ガガラ窯跡は奈良時代末のもので、小型であるが、残存状況は良好であった。平安時代には福成寺跡や露掛・納力・鶴田・未成地区より建物跡や土塁等が検出されている。



第1図 周辺遺跡分布図(1:25,000 清水原)

1. 平木池遺跡
2. 三ツ城古墳
3. 八幡山大池古墳
4. 銀山城跡
5. 銀千人塚遺跡
6. 銀西谷道路
7. 清水奥山道路
8. 東ガガラ窓跡
9. 西ガガラ古墳
10. 千野丸古墳群

このように広大キャンパス内や周辺には多数の遺跡が知られ、発掘調査も増加し、古代や中世の人々の生活がしだいに解明されており、今後が期待されている。

註

- (1) 広島県教育委員会「三ツ城古墳」『広島県文化財調査報告』第1集 1954。
- (2) 昭和56年5月より広島大学文学部考古学研究室が発掘調査中である。
- (3) (1)に同じ。
- (4) 潮見浩「西条周辺の遺跡・遺物」『広島県文化財ニュース』第35号 1967。
- (5) 原村史編纂委員会編『原村史』 1966。
- (6) (財)広島県埋蔵文化財調査センター「古墳時代の箱式石棺」「ひろしまの遺跡」第5号 1981。
- (7) 広島県教育委員会「安芸國分寺跡」第1次、第2次、第3次 1970, 1971, 1972。
- (8) 広島県教育委員会「山陽新幹線建設予定地内埋蔵文化財包藏地分布図」 1970。
- (9) 広島県教育委員会「安芸國分尼寺跡」第1次、第2次、第3次 1978, 1979, 1980。

III. 調査の概要

平木池遺跡は分布調査によって発見されて以来、試掘調査・予備調査・発掘調査（本調査）という一貫した調査体系をとり、その時々の協議によって方向づけられてきた。

試掘調査は遺跡南部を一辺13mの正方形のトレンチを設定し、掘り下げた。少量の須恵器が出土し、柱穴等が検出された。

予備調査は試掘トレンチの周囲に幅約2mのトレンチを東西、南北に19本入れた。その結果、東半では遺構・遺物とも検出されなかったが、中央及び西半では住居跡（S B03・07）や土塁（SK01・08）が検出され、少量の須恵器・土師器が出土した。

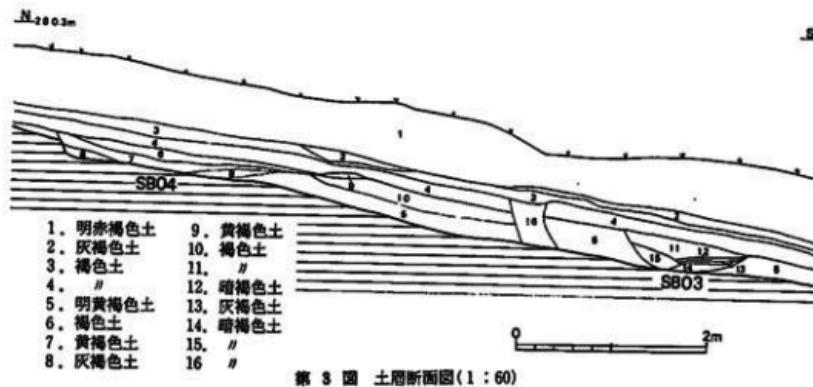
以上のことと踏まえて、発掘調査に臨んだ。

調査区の設定は試掘調査のポイントをもとに、東西、南北を10mごとに区切り、北西を基点に東西をA・B……I、南北を1・2……5としてその組み合わせで、区を表わすことにした。たとえばA-1区、B-3区などである。しかし、調査途中に北方と西方に拡張したので、北



第2図 遺跡周辺地形図及びトレンチ配置図(1:1,500)

1. 試掘調査区 2. 予備調査区 3. 本調査区



第3図 土層断面図(1:60)

のみ0を設けた。

調査対象範囲は予備調査時の西半及び中央で、これに関し、全面発掘を行うこととした。まず試掘調査、予備調査のトレンチを断面観察すると、ブドウ園造成時の盛土が1~1.5mほど見られたので、バックホー及びブルドーザーによって盛土分だけ全面排土することにした。次いで、人力によって旧地表面以下を剥がし、精査して遺構検出を行なった。その結果、数多くの住居跡や土塙などが検出され、須恵器・土師器・石器などが出土し、しかも、北方と西方に遺跡が広がっていることが判明したので、造成工事が行なわれている境界まで拡張した。

遺構検出面は、全体的に南にゆるやかに傾斜し、北半で8°、南半で4°を測り、等高線もほぼ東西に走る。微地形を見ると三つの尾根部（西・中央・東）と二つの谷部（西・東）に分けることができ、いずれも南北方向に伸びている。西の尾根はB-0~3区、C-0~3区の西半で、中央の尾根はD-2・3区の東半、E-1~3区の西半で、東の尾根はG-3・4区、H-1~4区である。西の谷はC-0~3区の東半で、東の谷がE-1~3区の東半、F-1~3区、G-1・2区である。この地形の起伏は元来顕著であったと思われ、ブドウ園造成の際、均一の傾斜面を造成する為、尾根部を中心に0.5~1m程度削平したらしい。その後、盛土が行なわれている。その為、谷部には一部旧地表面が残っているところもあったが、尾根部では遺構がいちじるしく削平されている。東の尾根では遺構がほとんど検出されていないが、削平の少なかったG・H-4区下半より多くの遺物が検出されており、ある程度の遺構の存在を暗示している。遺構検出面はすでに過去における部分的な掘削や擾乱のため遺構検出、掘り下げを非常に困難にした。またD-2区の土器窯としたものには数多くの須恵器の完形に近いものが集中して出土したが、ブドウ園造成の際、わざわざ集めて廃棄されたものであった。

以上の如く、遺構には不明確なものがあり、遺構の認定には細心の注意を払った。

検出した遺構は住居跡・建物跡（SB）26、土塙（SK）16、溝（SD）1である。遺構番

号は調査を行なった順に、遺構の内容には関係なく一連番号を付した。

住居跡・建物跡は一般的の竪穴式住居跡・作業場・掘立柱建物跡・その他を含むものである。

竪穴式住居跡は調査区北半に一定の間隔をもって並んで存在している。平面プランは長方形・方形のもので、緩斜面に立地しているので上方の地山をコの字状に削平して住居面としており、下半を欠失したものが多い。柱穴・壁溝・造り付けのカマド・炉跡を伴うものもある。

作業場と思われる遺構は調査区中央及び南半に東西に並んでいた。この内、中央の東西にあるものは、いちじるしく切り合って帯状を呈している。ピットや壁溝のあるものは少なく、床面も均一でないものもある。床面より多量の須恵器のほか、土師器・砥石が出土している。確認はないものの一般的な住居跡とは異なる。

掘立柱建物跡はSB17に代表されるもので、住居跡等の集中がみられる西半より離れた東半の谷に向かって存在している。幅広で、深い溝をもつもので、平面プランは隅丸コの字状で、一辺9.65mと大型である。その他これに類するもののがいくつかある。

土塙は平面プランが隅丸長方形のもの、楕円形のもの、不整円形のものなどがあり、遺物の出土が見られたものはすべて住居跡と同時期であった。

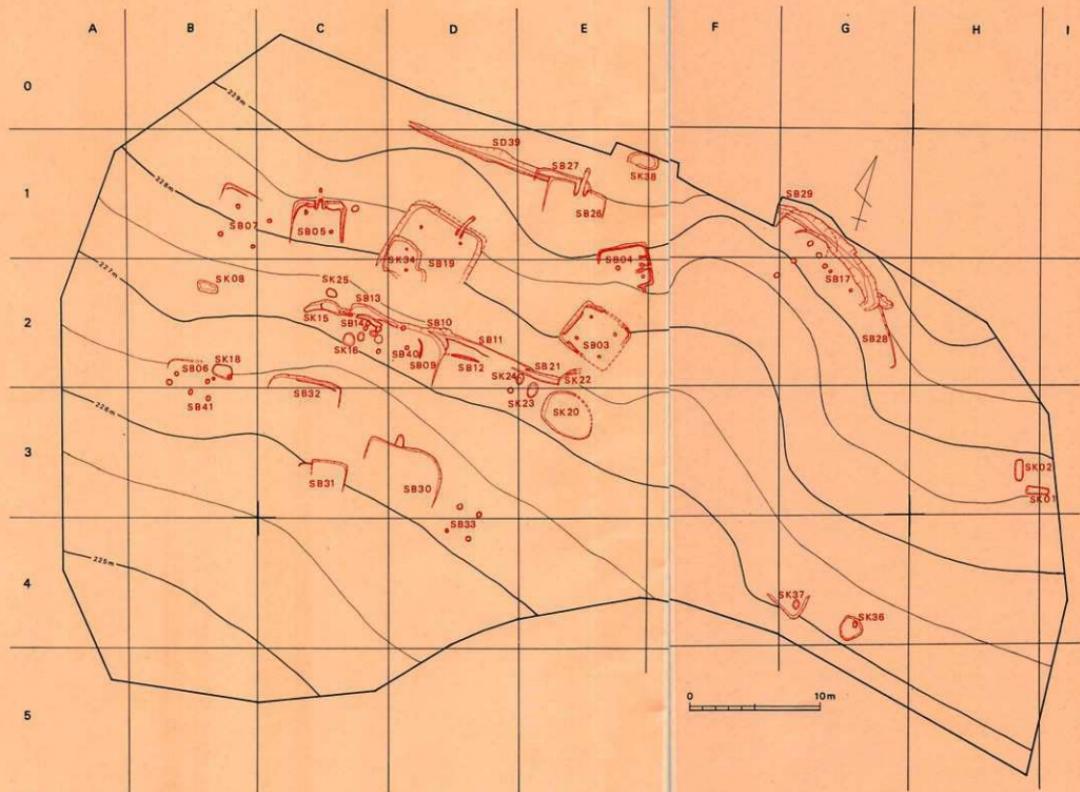
溝はSB19の北方に等高線に平行して存在する。立地・構造からみて土止めの為と思われる。

遺物は住居跡・建物跡を中心に須恵器・土師器・弥生土器・石器・鉄器が多数出土した。古墳時代のものは須恵器（壺蓋・壺身・高壺・塊・甕・瓶・翫）、土師器（甕・瓶・高壺・ミニチュア製品）、石器（砥石）、鐵器（鎌）である。これらはいずれも6世紀後半代に比定されるものである。その他旧石器～縄文早期、弥生時代の遺物が少量出土している。これは主に谷部の包含層や遺構内の二次堆積層から出土したもので、これに伴う遺構は残念ながら発見されなかった。

基本層序は盛土（明赤褐色土）、旧表土（灰褐色土）、褐色土、明黄褐色土、花崗岩の岩盤である。遺構検出面は明黄褐色土上面である。尾根部では先述のとおり、盛土層よりただちに花崗岩の岩盤に達する所が多く見られた。

遺跡の範囲は本調査開始時はすでに北半の丘陵尾根部が造成されており、検証することはできないが、遺物の出土状況や遺構の配列から北半に広がっていた可能性が高い。ただブドウ園造成の際、削平されて消滅していた可能性もある。

発掘調査面積は約3,000m²である。



第4図 造構配図(1:300)

IV. 遺構と遺物

A. 住居跡・建物跡

S B03 (第5図)

調査区中央のE-2区に位置し、S B04より南へ2m、S B21より北へ2mに存在する住居跡で、中央部は南北の試掘トレンチの為、削平されている。平面プランは南西コーナーがやや突出した長方形を呈し、主軸はN19°Eで、規模は検出面で長軸4.1m、短軸3.75m、床面で長軸3.5m、短軸3.2m、壁高25cmを測る。埋土は淡褐色土、茶褐色土、暗褐色土である。壁溝は四周をめぐり、幅30cm、深さ10cmである。柱穴は4本検出され、規模は径25~32cm、深さ40cmで、柱間距離は東西2.3~2.6m、南北2mとやや東西が長い。カマドは検出されなかったが、北辺が削平されているので、本来は存在した可能性もある。遺物は東端及び西端より須恵器・土師器が少量出土している。

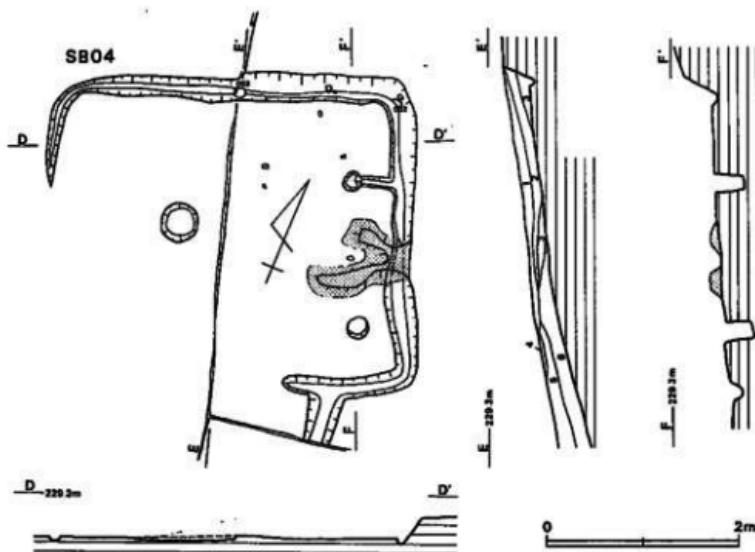
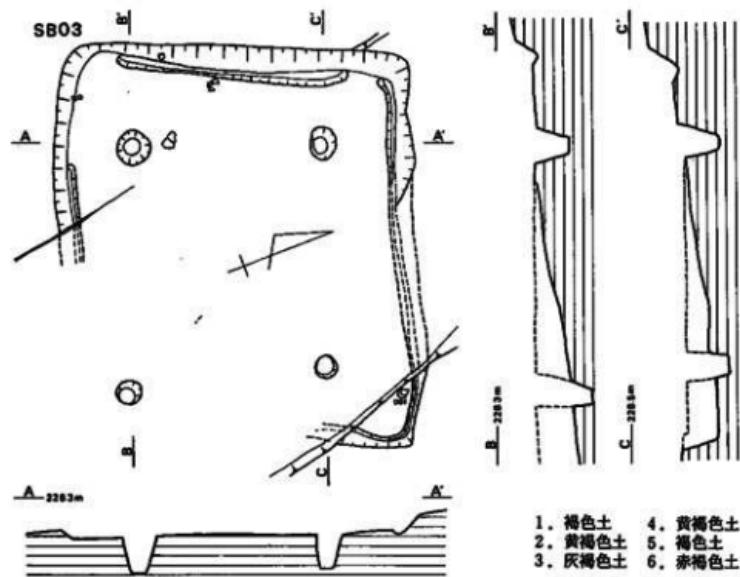
遺物 (第19図)

土師器

甕 (001) 口縁部～肩部の破片である。肩のあまり張らない体部より外反気味に立ち上がる口縁部を持つもので、口縁端部は丸く終わる。やや器壁が厚く、器面はあればいるが、ナデているものと思われる。胎土はやや粗、焼成は普通で、淡赤褐色を呈す。

S B04 (第5・6図)

調査区北半中央のE-1・2、F-2区に位置し、S B03より北へ2m、S B26より東南へ2mである。東半は試掘トレンチで削平されているが、南西コーナーを除き、ほぼ完存する竪穴式住居跡で平面プランは長方形である。主軸はN69°Eで、規模は検出面で長軸3.9m、短軸3.3m、床面で長軸3.5m、短軸2.85m、壁高30cmを測る。構築法は8°程度の傾斜を持つ丘陵斜面上方の北側をコの字状に削平し、下方の南側に盛土・貼床を行ない、一定の水平面を造り出して住居跡としている。埋土は褐色土、黄褐色土、灰褐色土で、壁溝は南西コーナーを除いて存在し、幅20~30cm、深さ5~10cmで、南東コーナーに近い南辺では南に向かって溝が伸びている。柱穴はすべて円形で3本検出され、西半のものは径40cm、深さ20cm、他の2本はカマドを挟む形で東壁より50cmの所にあり、径20cm、深さ30cmである。北東の柱穴と壁溝の間には浅い溝が掘られている。カマドは東壁の中央よりやや南に設けられており、長さ1m、幅80cmほどので、北側の袖部を欠失している。カマドの構築に当っては一旦掘られていた住居跡の壁溝を埋めて、褐色系粘土を用いて袖部を作っており、粘土は赤変して淡赤褐色を呈している。焚き口はやや凹凸があり、燃焼部には暗褐色土が堆積し、幅30cm、長さ40cmである。煙道は住居跡外部では検出されず、板や石を用いた特殊な構造を持っていた可能性もある。カマドを挟む小型ピットもカマドと何らかの関連を持っていたと思われ、煙道がトンネル式でないことと相



第 5 圖 SB03・04 斷面圖 (1 : 60)

俟って、このカマドの構造を考える上で非常に興味深い。遺物は002が北東コーナー、003が北辺中央のいずれも壁溝より出土しており、他に須恵器・土器も少量出土している。

遺物（第19図）

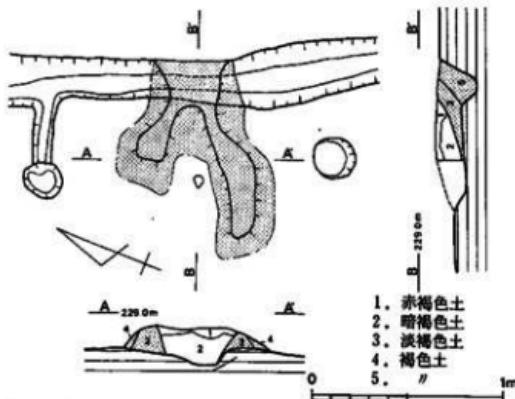
須恵器

壺蓋（003） 口径12cm。天井・体部は丸味を持ち、口縁部は短く直下し、口縁端部は丸く終わる。現存破片では内外面とも回転ナデ調整である。胎土は1mm前後の砂粒を含みやや密、焼成は良好で、暗灰色を呈す。

高壺（002・004） 002は完形品で、口径10.2cm、脚径7.6cm、器高7.5cm。壺部は底・体部が丸味を持ち、口縁部が直線的にやや外上方に開き、口縁端部が丸く終わる。脚部は短くラッパ状に広がるもので、脚端部は角ぼって終わる。壺部と脚部の中位には一条ずつの凹線がめぐっている。内外面とも回転ナデ仕上げで、壺底部内面にはカキメが見られた。胎土は1mm前後の砂粒を多く含みやや粗、焼成は脚部が良好で、壺部がやや不良、色調は脚部が暗灰色、壺部が淡灰褐色を呈す。004は脚部片で、脚部径12.4cm。脚裾部がラッパ状に広がるもので、脚端部は上下に肥厚させている。脚部中位には3条の凹線がめぐっている。胎土は密で焼成は良好である。淡灰色を呈す。

S B05（第7図）

調査区北西部のC-1区に位置し、S B07・S B19と並んで存在する住居跡である。斜面に立地している為、現状ではコの字状を呈し、やや北東コーナーが張り出している。主軸はN 8°Wで、規模は検出面で長軸4.15m、短軸3.2m、床面で長軸3.8m、短軸2.9m、壁高35mを測る。構築法は他と同様、斜面上方をコの字状に削平して平坦面を造り出し、これを床面として使用している。埋土は淡黄褐色土・暗茶褐色土である。壁溝は北辺、東辺及び北西コーナーに存在し、幅20~30cm、深さ5cmである。カマドの西側はやや深くなってしまい、東側は土塙状を呈している。柱穴は3本検出された。そのうち2本が重複しており、他に検出されなかったので、その構造は不明である。カマドは北壁中央よりやや南に設けられており、幅80cm、長さ60cmで、袖部は淡黄褐色系粘土を用いて構築されている。煙道はトンネル式で、断面が円形で、径25cm、長さ1.2mである。燃焼部との境より30cmまでほぼ平坦で、それより70cmまでは14°で登り、そこ



第6図 SB04カマド実測図(1:30)

より上方に屈曲して煙り出し口へつながる。煙り出し口は梢円形で40cm×25cmである。遺物はカマドのある北半に集中しており、カマド袖部上から006が、カマド前面から007が出土しており、他に須恵器・土師器が少量出土している。

遺物（第19図）

須恵器

壺蓋（005） 小型のもので、口径9.5cm。体部はやや丸味を帯び、口縁部は内湾気味に直下し、口縁端部は平坦面が内傾している。体部半分以上の内外面は回転ヘラ削りで、他は回転ナデ調整である。胎土はやや密、焼成は良好で灰色を呈す。

壺身（006） 完形成品で、口径12.1cm、器高4cm。底部は平坦で、体部はやや丸味を持ち、立ち上がりは短く内傾し、受部も短く外上方へ向く。底部外面は回転ヘラ切り、体部との境の外面は回転ヘラ削り、体部外面は回転ヘラ削り後回転ナデ、底部内面は一方向のナデで、他は回転ナデ調整である。胎土は2～3mmの砂粒を多く含み、焼成はやや不良で、淡灰色を呈す。

土師器

壺（007） 口径19.6cm。体部は球形で、頸部はくの字に屈曲し、口縁部は外反し、口縁端部はやや尖り気味に終わる。磨滅が激しく、調整がわかりにくいか、ナデしているものと思われる。胎土は砂粒を含み粗である。焼成は普通で、淡褐色を呈す。

S B 06（第7図）

調査区西端中央のB-2区に位置し、S B32より西へ3mで、S B41、SK18と重複している。住居跡の東半部はブドウ園造成の際上面が削平されており、残存状態が悪く、壁高も5cmほどである。主軸はほぼ南北を向き、柱穴は2本検出された。規模は径30cm、深さ10cmで、柱間距離は2.35mである。S B41・SK18との新旧関係は不明である。遺物は008が北辺より出土し、その他須恵器・土師器が少量あり、ミニアチュア製品（010）も出土した。

遺物（第19図）

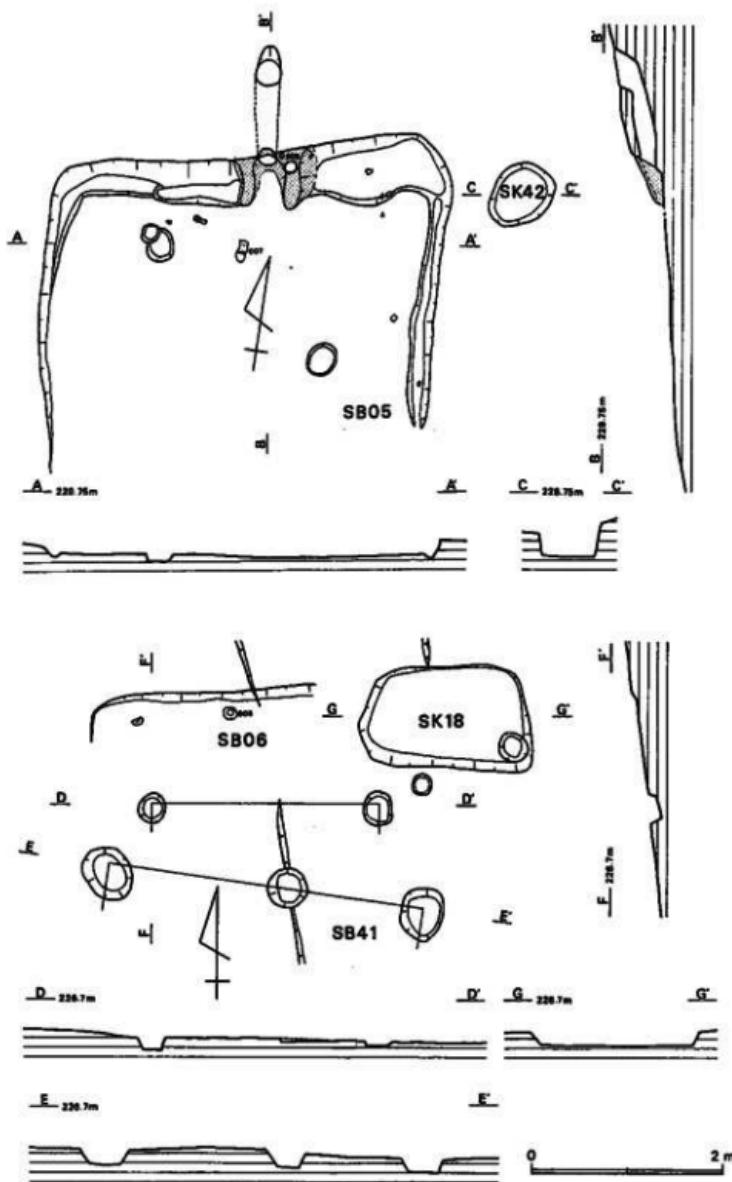
須恵器

壺蓋（008） 口径12.6cm、器高3.9cm。天井部は平坦で、体部は丸味を持ち、口縁部は短く直下している。天井部外面は回転ヘラ切り、体部との境には回転ヘラ削りを、他は回転ナデである。ロクロの回転方向は時計回りである。胎土は微砂粒を含む密で、焼成も良好で、暗灰色を呈す。

壺身（009） 口径11.6cm。立ち上がりは内傾気味に立ち、受部は外上方へ向く。端部はいずれも丸く終わる。立ち上がりはオリコミ手法による。胎土・焼成は良好で、暗灰色を呈す。

土師器

ミニアチュア製品（010） 長さ3.5cm、最大径2.1cm。中央の球形から上・下に脚が伸びたような形をしており、"三輪玉"を二つ合わせた形にも似ている。成形法として中央の球形に筒状の脚を繋ぎ足しており、特にその繋ぎ目は強く押した指頭の痕跡をよく残している。胎土は微



第7図 SB05・06・41, SK18・42実測図(1:60)

砂粒を含むが精良、密で、焼成はやや不良で、淡赤褐色を呈す。他にSB31より1点出土しているが、形態や性格、機能等不明な点が多い。

SB07 (第8図)

調査区北西のB・C-1区に位置し、SB05の西2mの位置にある。SB06同様、尾根に立地しているが削平がいちじるしく、北西コーナーが残存するのみである。主軸はN11°Eで、壁高は15cm程度で、壁溝は北西コーナーの壁に沿って存在し、幅25cm、深さ5cmである。柱穴は4本検出され、規模は径30cm、深さ10~30cmで、北側の2本には柱の痕跡が見られ、柱間距離は東西2.7m、南北2.3~2.6mである。カマドは現状では存在しないが北辺には焼土が3か所見られ、特に東側のものは径60cmの範囲に広がっており、カマドであった可能性が強い。遺物は北辺に土師器壺の破片が出土している。

SB09 (第9図)

SB09~14・21・40の住居跡群は調査区中央より西半にかけて東西に細長く存在しており、重複をくりかえしているもので、一般的の住居跡とは構造を異にしていると思われる。ブドウ園造成の際、上面が削平され、残存状態は悪い。

SB09はそのほぼ中央のD-2区に位置し、SB10~13・40等と重複している。北辺及び東辺が存在しており、隅丸コの字形を呈するものと思われ、主軸は南北を向き、規模は東西4.4m以上、南北4mほどであろう。壁溝・柱穴・カマド等は検出されなかった。新旧関係はSB40→SB14→SB09←SB10←SB11である。遺物は須恵器・土師器・砾石が多数出土している。

遺物 (第19・20・28図)

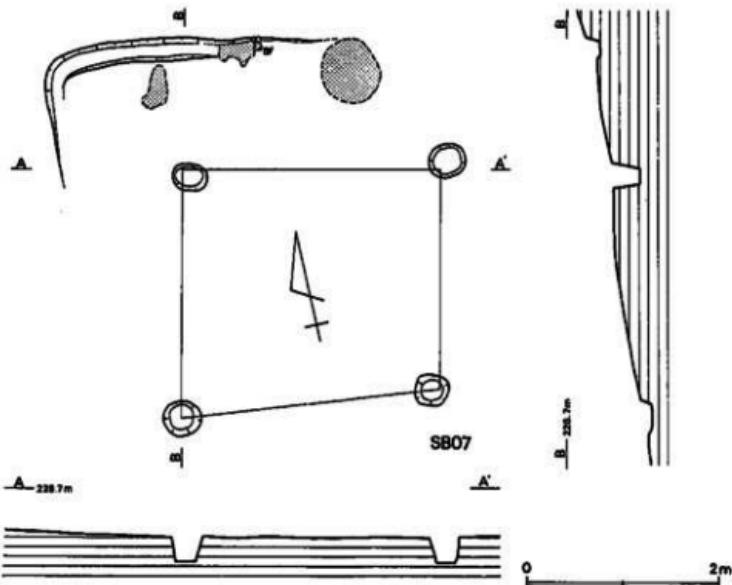
須恵器

壺蓋 (011) 口径17cm。口径部は直線的に外下方に下るもので、口縁端部は丸く終わる。胎土は砂粒を多く含みやや粗、焼成は不良。茶灰色を呈す。

壺身 (012-013) 012は口径12.4cm。体部は直線的で、立ち上がりは短く内傾し、受部は断面三角形気味で、内外面とも回転ナデ調整である。013は口径12.2cm。体部は丸くなっている。立ち上がりは内傾後直立し、端部は丸く、受部もわずかに外上方に向かって、端部は丸く終わる。内外面とも回転ナデである。両方とも胎土は1mm前後の砂粒を多く含みやや粗で、焼成は普通。灰色を呈す。

高壺 (014) 脚据部片で、脚径9.6cm。ラッパ状に大きく開くもので、脚端部の手前で鋭く折れ曲がり、ほぼ水平になっている。脚端部は上下に拡張させている。胎土は密、焼成は良好で、外面は暗灰色、内面は灰色を呈す。

甕 (015-016) 015は中型甕の口縁部で、口径12cm。短く外反する口縁部を持つもので、口縁端部は外側を肥厚させている。体部内面には同心円文がある。胎土は微細砂粒を含み密、焼



第8図 SB07実測図(1:60)

成はやや不良で、淡灰褐色を呈す。016は大型壺の口縁部で、口径21.8cm。直立気味に外反する口縁部を持つもので、口縁端部は外側を肥厚させ、その直下には段がある。胎土は密、焼成は良好で、外面は暗灰色、内面は灰色を呈す。

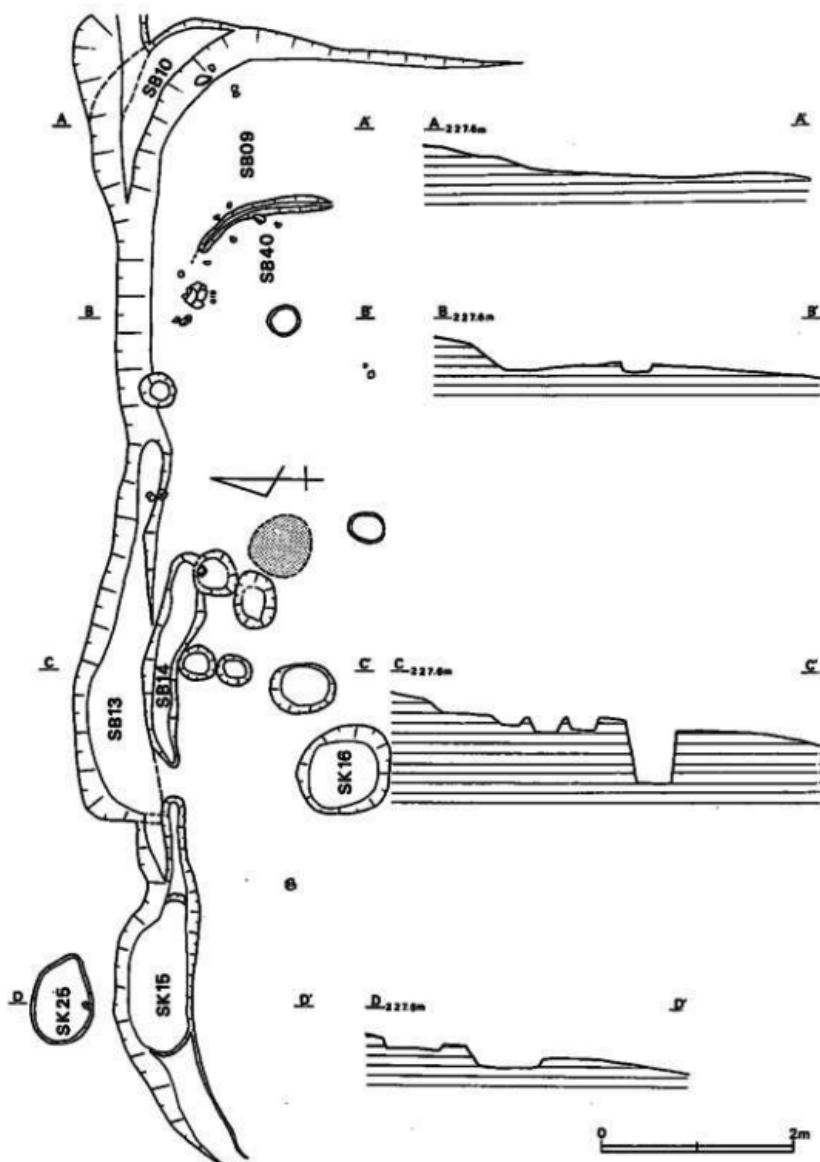
甌(017) 脚部片で、脚径13cm。器肉は厚く、脚端部で急激に細くなっている。円孔が外側より穿たれているが、貫通していない。胎土・焼成とも不良で、淡灰褐色を呈す。

土器器

甌(018) 口縁部片で、口径15.8cm。頸部がはっきりせず、わずかに外反する口縁部を持つもので、口縁部はヨコナデである。胎土は砂粒を多く含む粗で、焼成は普通で、淡赤褐色を呈す。

甌(019) 完形に近いもので、口径22cm、脚径11.4cm、器高23.1cm。口縁部は外反気味に広がり、口縁端部は丸い。体部はやや丸味を持ち、その肩部には一对の把手が付く。把手は角頭状、断面はやや扁平で、ていねいにナデて作られている。脚部は直線的に内下方に下り、脚端部はやや尖り気味に終わる。器壁は荒れて、調整は不明である。胎土は砂粒をやや含み密、焼成はやや不良で、淡黄褐色を呈す。

石器



第9圖 SB09・10・13・14・40, SK15・16・25実測図(1:60)

砾石(143~145) 143はややバチ形を呈するもので、長さ5.5cm、幅3cm、厚さ2.3cmを測る。6面すべてを使用したもので、滑らかで、擦過痕が残る。144は下半を欠失しているが、バチ形を呈するもので、現存長4cm、幅3.5cm、厚さ2.1cmを測る。4面を使用したもので、表面は非常に滑らかである。145はやや不整な5面体で、断面が三角形である。11×8cm、厚さ4.1cmで、3面を使用している。いずれも淡褐色を呈し、花崗岩質の流紋岩製である。

S B10 (第9図)

S B09の北東コーナーの北側に存在する。掘り込みが浅いので、ほとんど残存していないが、隅丸のコーナーで、東西2m、南北1.5m、整高は10cmを測る。新旧関係はS B11→S B10→S B09である。遺物は須恵器・土師器が少量出土している。

遺物 (第20図)

須恵器

甕(020) 口縁部片で、口径16.2cm。口縁部がわずかに外反するもので、端部は丸く、外側に肥厚させている。胎土は砂粒を少し含みやや密で、焼成は良好。暗灰褐色を呈す。

S B11 (第10図)

D-E-2区に位置し、東半をS B21、西半をS B10と重複している。北辺のみ検出でき、軸は東西を向き、東西7m、壁高10cmを測る。溝は北壁に沿って存在し、規模は幅50cm、深さ5cmを測る。柱穴・カマド等は検出されなかった。新旧関係はS B11→S B10で、S B12との関係は不明である。遺物は土師器が少量出土している。

S B12 (第10図)

S B11の南側に並行して、検出された。溝のみ残存しており、軸はN83°Eで、規模は幅20cm、深さ5cm、長さ2.4m以上である。S B11との新旧関係は不明である。

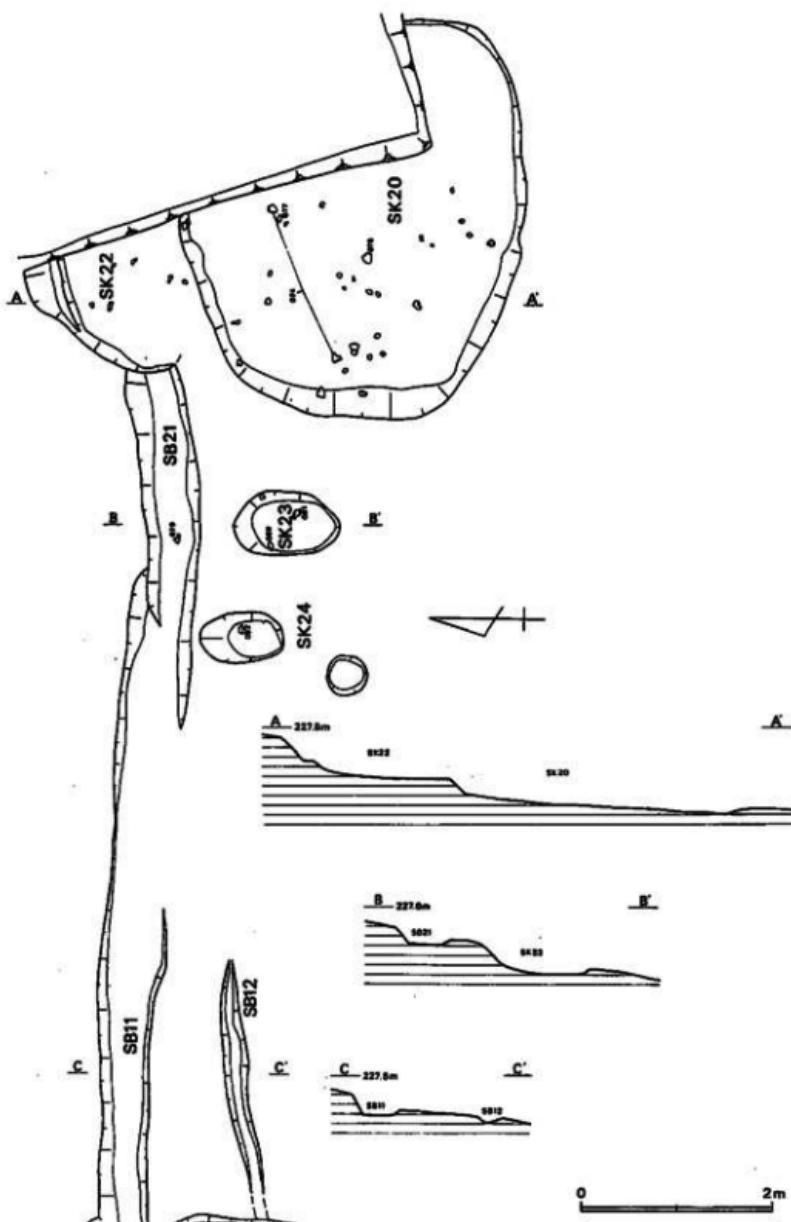
S B13 (第9図)

D-2・3区に位置し、S B14等と重複している。北西コーナー及び北辺が残存している。主軸はN7°Wで、規模は東西4m、南北0.6m、壁高15cmを測る。整溝・柱穴は検出されなかつた。新旧関係はS B13→S B14である。遺物は須恵器・土師器が少量出土している。

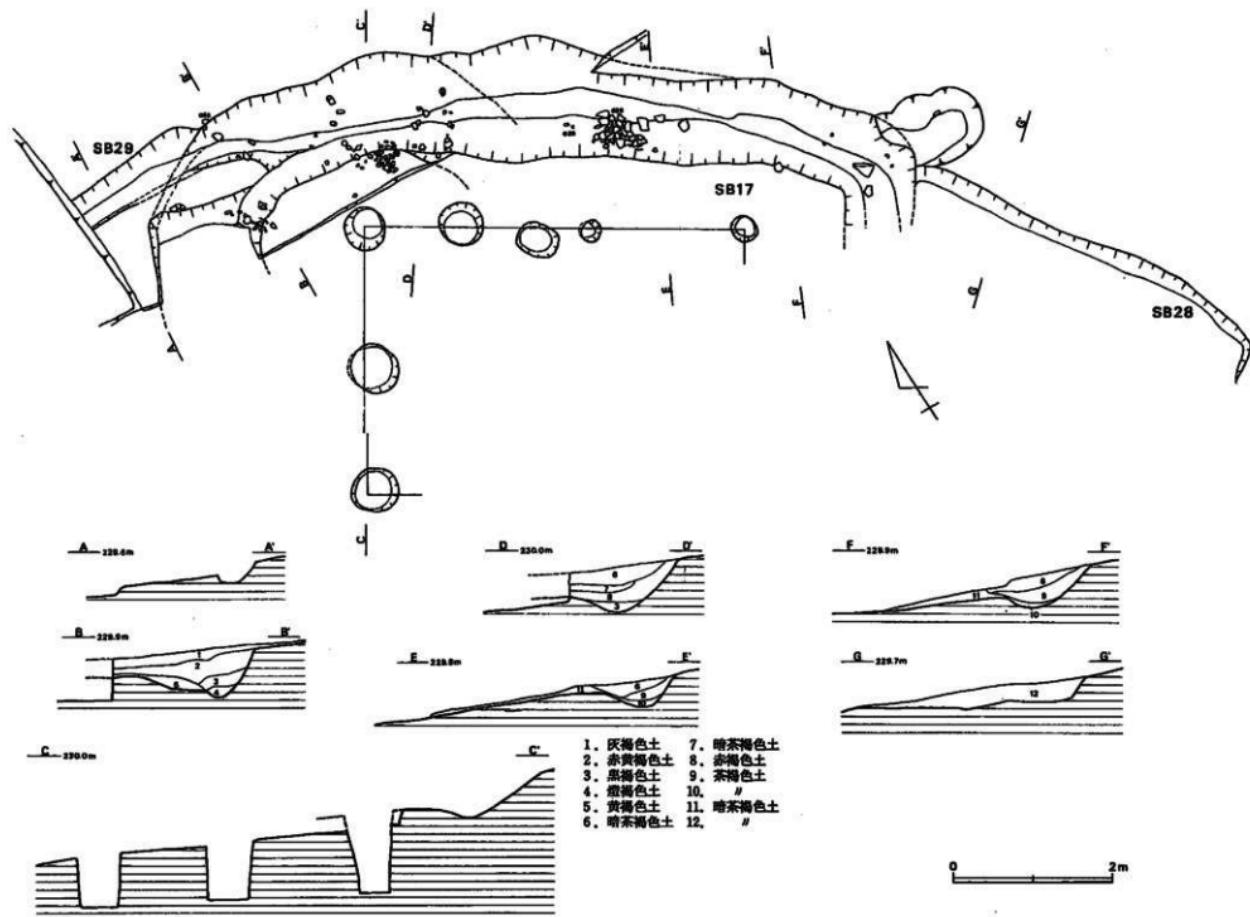
遺物 (第20図)

須恵器

高坏(021・022) 脚部片で、口径は021が9.5cm、022が8.8cm。脚裾部は大きくラッパ状に開き、脚端部は上下に肥厚させている。胎土・焼成とも良好で、021が暗青灰色、022が灰色を呈す。



第10圖 SB11・12・21, SK20・22～24実測図(1:60)



第 11 圖 SB17・28・29 斷面圖 (1 : 60)

S B14 (第9図)

C-2区に位置し、S B09・13・40、S K15・16と重複している。北辺のみ存在しており、主軸はN 3°Eで、規模は東西6.3m、壁高25cmを測る。溝は幅20~40cm、深さ10cm、中央で途切れおり、一定していない。柱穴は多数検出できたが、どれが対応するのか不明である。東半には径60cmの焼土がある。新旧関係はS B13→S B14←S B40である。

遺物 (第20図)

須恵器

塊 (023) 大型のもので、口径24.8cm。体部は丸く、口縁部は直立し、口縁端部はヘラ状工具で、内面及び上面をナデて平坦にしている。外面は左及び左下のヘラ削りが顕著で、内面は不定方向のナデ仕上げである。胎土は2mm前後の砂粒を多く含む。焼成は良好で、灰褐色を呈す。S B27出土の破片と接合した。

S B17 (第11図)

調査区北東のG-1・2区に位置し、東半でS B28、西半でS B29と重複している。平面プランは細長い隅丸コの字状を呈し、主軸はN 32°Eで、規模は長軸9.65m、短軸2m、壁高50cmを測る。構築法は他と同様、斜面上方を削平し、下方に盛土・貼床を行なったものと思われる。溝は壁に沿って存在し、幅1.2m、深さ25cmである。柱穴は7本検出され、径30~50cm、深さ70~80cmで、2間×3間あるいは2間×2間ほどの建物になるものと思われ、建物の規模は桁行長4.8m、梁行長3.4mである。本遺構は幅広で深い溝を持ち、掘立柱建物が建ち他の住居跡と構造を異にしている。遺物は溝の上面などから須恵器・土師器が多数出土している。新旧関係はS B17→S B29である。

遺物 (第20・21図)

須恵器

坏身 (024・025) 024は浅いもので、口径11cm、器高2.7cm。立ち上がりは短く直立し、受部は短く外上方へ伸びる。底部外面は回転ヘラ切り、体部との境には回転ヘラ削りが施され、他は回転ナデ調整である。ロクロの回転方向は時計回りである。胎土・焼成とも良好で、色調は淡灰色を呈す。025は深いもので、口径14.4cm。底・体部は丸くなり、口縁部は外反気味に立ち上がる。底部外面は回転ヘラ削り、内面は一定方向のナデで、他は回転ナデである。胎土は1~2mm前後の砂粒を含みやや粗。焼成は良好で、色調は外面が灰色、内面が暗灰色を呈す。

高坏 (026) 坏部片で、口径10.2cm。底部はほぼ平坦で、体部で大きく屈曲し、口縁部は内上方へ伸びる。口縁端部は尖り気味に終わる。体部外面には2条の凹線がある。底部外面は回転ヘラ削り後回転ナデで仕上げており、他も回転ナデ調整である。胎土は微細な砂粒を含みやや密で、焼成は良好である。暗灰褐色を呈す。

壺(027) 口縁部片で、口径20cm。口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部は外側に肥厚させ、断面が三角形に近くなっている。体部外面はタタキメ、内面は同じ円文を残し、他は回転ナデである。胎土には2~3mmの砂粒を含み、焼成は普通で、淡灰褐色を呈す。

横瓶(028) 完成品に近いもので、口径11.2cm、器高27.9cm、最大胴部径35cm。体部は丸味を持つ梢円形を呈し、頸部はくの字に屈曲し、口縁部は大きく外反し、口縁端部は丸く終わっている。体部外面はタタキメ後カキメを施し、内面は同心円文をよく残している。最大胴部は径6.5cmの穴を粘土で塞いでいる。口縁部は内外面とも回転ナデである。胎土はやや密、焼成は良好で、灰色を呈す。

土師器

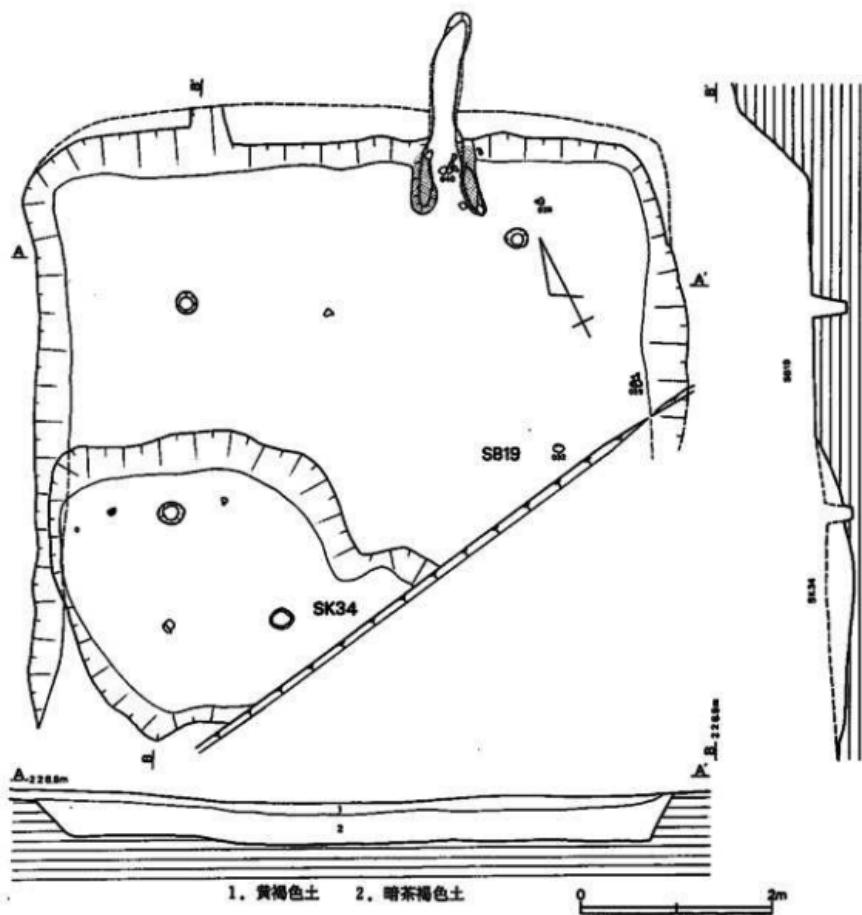
壺(029) 口縁部片で、口径20cm。口縁部は大きく外反するもので、口縁端部は丸く終わる。体部内面はヘラ削りで、他はナデている。胎土は1mmの砂粒を多く含みやや粗、焼成は普通で、淡褐色を呈す。

S B 19 (第12・13図)

調査区北西のD-1・2区に位置し、S B05と並んで存在する住居跡である。住居跡南東部は東西の試掘トレンチの為、削平されており、南西部にはSK34が存在する。平面プランはコの字状のほぼ正方形を呈するもので、主軸はN23°Eで、規模は検出面で6.8×6.4m、床面で6×5.8m、壁高70cmを測る。構築法は他と同様、斜面上方をコの字状に削平し、下半に盛土・貼床を行なってほぼ方形の堅穴式住居跡としている。その際、SK34も埋めて貼り床を行なっている。埋土は黄褐色土と暗茶褐色土で、切り込んでいる地山は谷部に立地している為、黄褐色土である。柱穴は3本検出され、規模は径20cm、深さ40cmである。カマドの横にある1本がややずれており、他の2本は住居跡の方向、距離と合致している。もともとは4本柱構造のものと思われるが、東半の2本が検出できなかった。西半の2本の柱間距離は2.2mである。カマドは北辺の東より設けられており、幅1.6m、長さ1.4mである。袖部は淡黄褐色系粘土で構築されており、特に、東袖部の南端には補強の為、細長い石が立てられていた。現状では煙道の天井部が検出できなかったが、先述の通り、谷部に位置して地山が軟弱な為、天井部が当初より存在しなかったのか、トンネル式であったものがくずれたのか不明である。煙道の規模は幅50cm、長さ2.7mで、傾斜は燃焼部との境より70cmまでは22°、それより1.9mまでは18°で登っている。カマドの横の柱穴はS B04と同様、カマドとの関連が考えられる。遺物は040が焚口から燃焼部にかけて出土し、他に須恵器・土師器等が多数あるが、石錐2点が出土したことからもわかるように流入したものが多いものと思われる。

遺物 (第21・22図)

須恵器



第 12 図 SB19, SK34 実測図 (1 : 60)

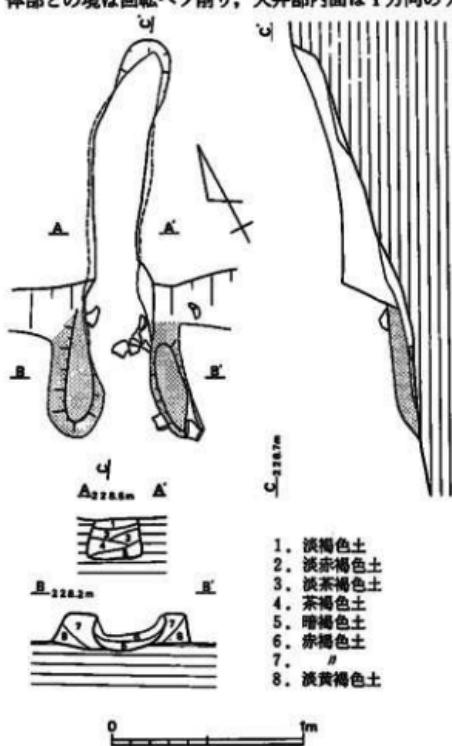
壺蓋 (030~033) 030は口径15.2cm, 器高3.6cm。天井部は広く平坦で、体部は丸く、口縁部は直接的にやや下方に伸びており、口縁端部は丸く終わる。天井部外面は回転ヘラ切り、

体部との境は回転ヘラ削り、天井部内面は1方向のナデ、他は回転ナデである。ロクロの回転方向は時計回りである。なお、天井部外面には窯内で付着した破片がある。胎土はやや密、焼成は良好で、外面は灰色～黒灰色、内面は灰色を呈す。031～033は天井部は丸くなり、体部との境には段を有し、体部はゆるやかに広がり、口縁部は短く直下する。口縁端部は丸く終わる。030に比べ、深いものである。天井部外面は回転ヘラ削り、他は回転ナデ調整である。ロクロの回転方向は時計回りである。032は口径13.6cm、器高4.6cm。胎土は砂粒を含むやや密、焼成は普通で、淡灰褐色を呈す。033は口径13.8cm、器高4.3cm。胎土は密、焼成は良好で、暗灰色を呈す。

坏身(034～036) 034は口径12cm。立ち上がりは短く直立し、受部は短く外上方へ伸び、いずれも端部は丸く終わる。内外面とも回転ナデである。胎土・焼成とも良好で、灰色を呈す。035は口径12.5cm。体部はやや直線的に広がり、立ち上がりは短く内傾し、受部は短く外上方へ伸び、端部は両方とも丸く終わる。胎土は微細砂粒を含み密、焼成も良好で、淡灰褐色を呈す。036は口径10.6cm。底部は広く平坦で、体部は丸く、立ち上がりは内傾後直立し、受部は外上方へ伸びる。立ち上がりはオリコミ手法である。底部外面は回転ヘラ切り、体部との境は回転ヘラ削りで、他は回転ナデ仕上げである。ロクロの回転方向は時計回りである。胎土は密、焼成も良好で、灰色を呈す。

高坏(037) 脚部で、脚径10.2cm。ひずみがいちじるしい。短脚で、内湾気味に開き、端部は角張って終わる。内外面とも回転ナデ仕上げである。胎土・焼成とも良好で、黒色～灰色を呈す。なおSB03出土の破片と接合した。

壺(038) 口径16cm。体部は肩を張らず、口縁部はわずかに外反し、口縁端部は外側に肥厚させている。体部外面はタキ後カキメを施しており、内面は同心円文が残っている。口縁部



第18図 SB19カマド実測図(1:30)

は回転ナデである。胎土は砂粒を多く含み、焼成は不良で、淡灰褐色を呈す。

土師器

甕 (039・040) 039は口径16.6cm。肩の張らない体部よりゆるやかに外反する口縁部を持つもので、体部内面はヘラ削り、他はナデている。胎土は1mm前後の砂粒を含みやや粗、焼成は普通で、淡赤褐色～淡褐色を呈す。040は口径17.2cm。039とほぼ同様で、体部外面にはハケメが見られる。胎土は1mm前後の砂粒を多く含みやや粗、焼成は普通で、暗褐色～褐色を呈す。

S B21 (第10図)

調査区のほぼ中央E-2区にあり、S B03より南へ3mの位置にある。西半でS B11、東半でS K20・22と重複している。北辺の中央部しか存在せず、軸は東西を向き、規模は東西2.8m、壁高15cmを測る。壁溝は北辺にあり、幅60cm、深さ5cmである。新旧関係はS K20→S B21→S K22である。遺物は須恵器・土師器が少量出土している。

遺物 (第24図)

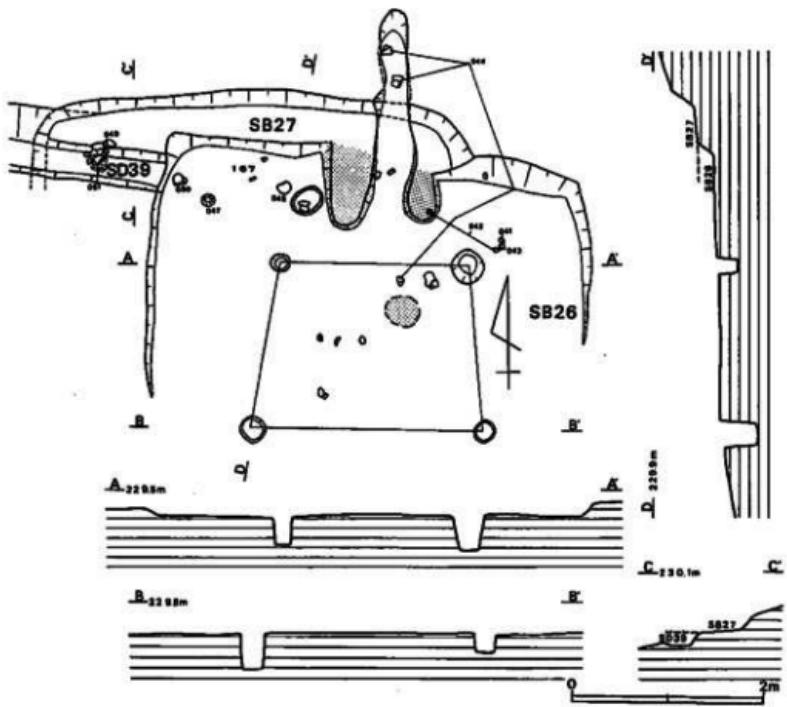
須恵器

坏蓋 (079) 口縁部片で、口径13cm。口縁部は短く直下し、回転ナデ調整を行なっている。胎土・焼成とも良好で、黒褐色を呈す。

S B26 (第14・15図)

調査区北半のE-1区にあり、S B04より北西へ2mの位置にある。S B27・S D39と重複関係にある。平面プランはコの字状の長方形を呈し、主軸は南北を向き、規模は検出面で長軸4.5m、短軸2.75m、床面で長軸4.4m、短軸2.6m、壁高35cmを測る。構築法は他の住居跡同様、斜面上方をコの字に削平し、水平な床面を造り出している。埋土は黄褐色土、淡黄褐色土である。壁溝は検出されなかった。柱穴は5本検出されたが、4本柱になるものと思われ、規模は径20~30cm、深さ20~40cmで、柱間距離は東西(北)1.86m、(南)2.4m、南北1.62mである。カマドは北壁の中央よりやや東に設けられており、袖部や煙道部の上面が、S B27の構築の際削平されている。規模は幅1.25m、長さ0.9mである。袖部は黄褐色～褐色系粘土で構築されており、赤変している。燃焼部には淡黄褐色土、暗褐色土が埋っており、底面はやや凹凸がある。煙道部は幅0.3m、長さ1.5mで、燃焼部との境より25cmまでは4°、それより1.05mまでは14°で登り、屈曲して立ち上がる。S B19同様、これにも天井がなく、トンネル式であったのか否か不明である。カマドの西側にある柱穴は径30cm、深さ10cmで、S B04のカマドの両側にあった柱穴と同様な機能を果した可能性がある。カマドの南側1mの所へ径30cmの焼土が見られ、炉跡と思われる。新旧関係はS D39→S B26→S B27である。遺物は須恵器・土師器・鉄器が多量に出土している。

遺物 (第22・29図)



第14図 SB26・27実測図(1:60)

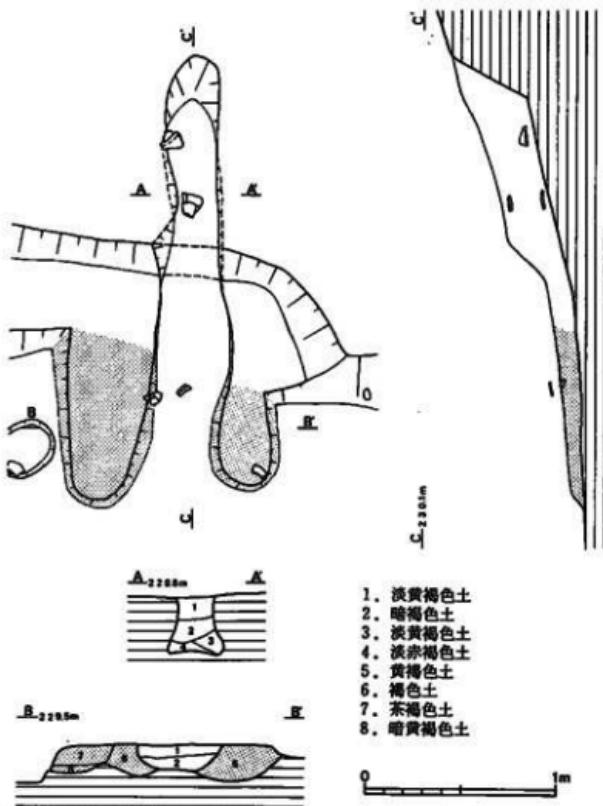
須恵器

高坏(041) ラッパ状に開く脚部をもつもので、回転ナデ調整を施してある。胎土は砂粒を多く含みやや粗、焼成は不良で、淡褐色を呈す。

甕(042-043) 042は口径16cm。口縁部破片で、外側を肥厚させ、段となっている。胎土は砂粒を含み、焼成は不良で、淡褐色を呈す。043は口径14.8cm。042と同様で、肥厚させた口縁部には凹線が入っている。胎土は砂粒を多く含みやや粗、焼成は普通で、灰色を呈す。

土師器

甕(044) 口径14.6cm。筒状を呈し、頸部がわずかにくびれている程度である。手づくねで巻き上げられており凹凸がはげしく、造りとしては粗雑である。胎土はやや粗、焼成もやや不良で、暗褐色を呈す。



第15図 S B26カマド実測図 (1:30)

鉄器

摘要 (167) 現存長6cm、幅2.1cm。一方の端を欠失しているが、両端を折り曲げ、木柄を差込んだもので、上端には木質が残存していた。

S B27 (第14図)

調査区北半のE-1区に位置し、S B26・S D39と重複している。本遺構はS B26・S D39の北側をコの字に削平し、南半に盛土・貼床して平坦面を造り出している。主軸は南北を向き規模は検出面で長軸4.6m、短軸0.8m、床面で長軸4.15m、短軸0.5m、壁高25cmを測る。これに伴なう柱穴や壁溝は検出されなかったが、遺物は須恵器・土師器が多量に出土している。

遺物 (第22・23図)

須恵器

壺蓋（045・046） 045は口径14.8cm、器高5cm。天井部・体部は丸く、口縁部は外下方に下がり、口縁端部は丸く終わる。天井部外面は回転ヘラ切り、体部との境は回転ヘラ削りで、他は回転ナデである。ロクロの回転方向は時計回りである。胎土は非常に密、焼成は不良。外面は淡灰色、内面は淡赤褐色を呈す。046は口径12.6cm、器高3.5cm。天井部は平坦で、体部との境に稜をなし、口縁部は短く直下する。天井部外面は回転ヘラ切り、内面は一定方向のナデ。他は回転ナデ調整である。ロクロの回転方向は時計回りである。胎土は1mm前後の砂粒を少し含み、焼成は良好で、灰色を呈す。

壺身（047） 口縁部を欠失している。底部は平坦で、体部は丸くなっている。底部外面は回転ヘラ切り、他は回転ナデ調整である。胎土は2～3mmの砂粒を含み、焼成は不良で、外面は淡灰色、内面は淡赤褐色を呈す。

高壺（048） 脚部及び壺底部の破片で、脚径10.4cm。低脚のもので、脚部はラッパ状に大きく開き、脚端部はやや下方に肥厚させている。壺底部外面は回転ヘラ削りで、他は回転ナデである。

土師器

甕（049・051） 049は口径21.8cm。頸部はくの字に屈曲し、口縁部は直線的に外反している。体部内面は頸部よりやや下った所からヘラ削りを行なっており、他はすべてナデである。胎土は砂粒を多く含み、焼成は普通で、赤味がかった褐色である。051は把手付の甕で、口径29cm。球形に近い体部からくの字に大きく外反する口縁部を持つもので、端部は丸く終わる。体部中央には一対の把手があり、断面は円形に近く、ていねいにナデしている。体部内面は頸部以下をヘラ削りし、他はナデである。胎土は2～3mmの砂粒を含みやや粗で、焼成は普通、黄褐色を呈す。

瓶（050） 脚径20cm。体部は脚端に向って内傾し、脚部はやや外反して終わる。内面はヘラ削り、外面はハケメである。胎土は1～3mmの砂粒を含み粗、焼成は普通で、暗褐色を呈す。

S B 28（第11図）

調査区東北のG-2区に位置し、西半でS B17と重複している。コの字状の平面プランで、主軸はN56°W、規模は検出面で長軸4.8m、短軸0.6mで、下半の流出がいちじるしい。壁溝・柱穴は検出されなかった。新旧関係は不明である。遺物は須恵器・土師器が多数出土している。

遺物（第23・28図）

須恵器

壺身（052） 口径11.2cm。立ち上がりはやや内傾し、受部は短く外上方へ伸び、端部は上方へ丸く終わる。内外面とも回転ナデ調整である。胎土・焼成とも良好で、暗灰色を呈す。

土師器

甕 (053) 口径9.2cm。頸部がくの字に屈曲し、口縁部は外反している。胎土は1mm前後の砂粒を含み、焼成は普通で、淡茶褐色を呈す。

把手 (054) 角頭状で、断面はやや橢円形である。ナデているが、ハケメの残るところもある。胎土は2mm前後の砂粒を含み、焼成は良好で、淡赤褐色を呈す。

石器

砥石 (148) 長方形を呈するもので下半を欠失しており、現存長5.2cm、幅3.9cm、厚さ1.6cmを測る。4面を使用したと思われる、そのうち1面は磨滅してややくぼんでいる。条痕が3面に残る。花崗岩質の流紋岩製で仕上砥である。

S B 29 (第11図)

調査区北東のG-1区に位置し、東半でS B17と重複している。西半は発掘区外である。S B17とほぼ同様の構造の遺構と思われる、斜面上方を隅丸コの字状に削平するとともにS B17を埋め、貼床を行なっているものと思われる。主軸はN 5°Eで、規模は東西5.4m、南北1.5m、壁高20cmを測る。壁溝は北辺に沿っており、幅90cm、深さ20cmである。柱穴は確認できなかった。遺物は溝を中心に須恵器・土師器が多数出土している。

遺物 (第23図)

須恵器

壺蓋(055) 浅いもので、口径12.6cm。天井部は平坦に近く、口縁部は外下方に伸びている。天井部外面は回転ヘラ切り、体部外面は回転ヘラ削り、他は回転ナデである。ロクロの回転方向は反時計回りである。胎土は砂粒をやや含み密、焼成は良好で、色調は暗灰色を呈す。

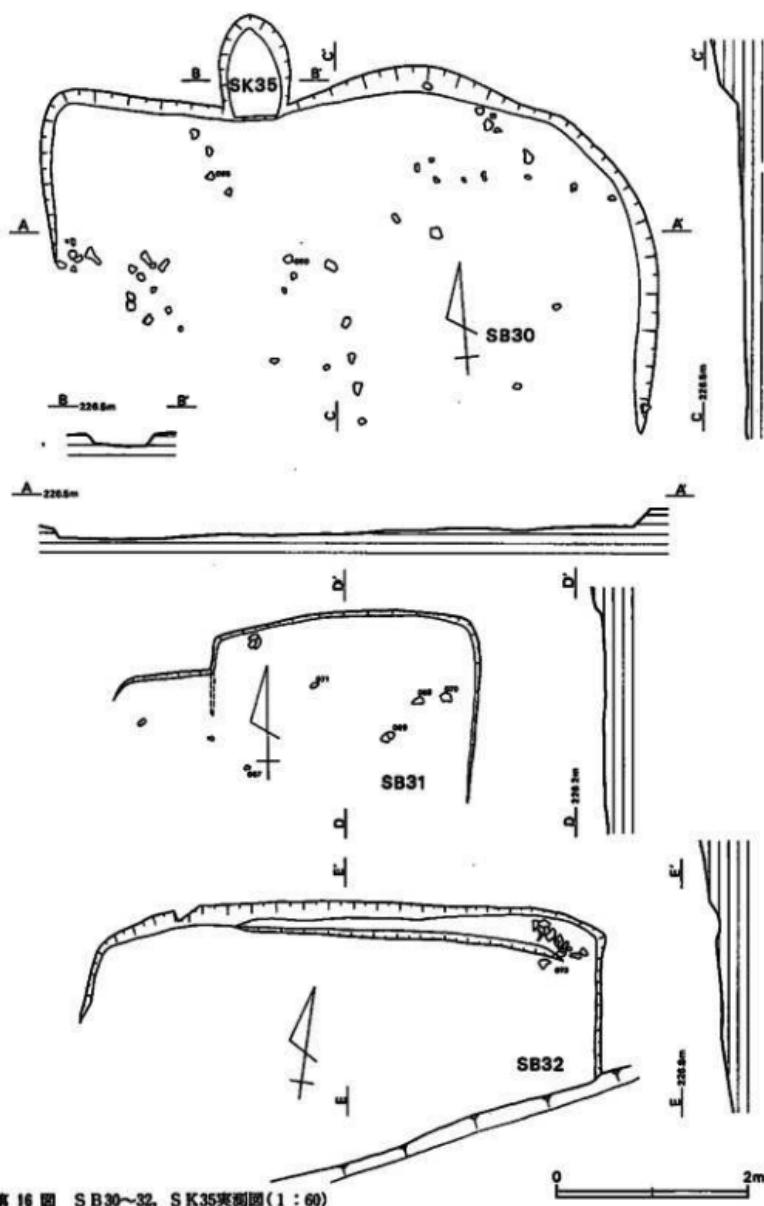
壺身 (056・057) 056は口径10.4cm。立ち上がりは短く内傾し、受部は外上方へ伸びる。内外面とも回転ナデ調整である。胎土は密、焼成は良好で、灰色を呈す。057は口径14cm。底部は広く平坦で、口縁部はやや内溝気味に外上方に伸びる。器面はいちじるしく荒れている。胎土は砂粒を含み粗、焼成は普通で、淡灰色を呈す。

高壺 (058・059) 脚裾部が大きくラッパ状に開くもので、脚端部は下方へ肥厚させている。内外面とも回転ナデ調整である。058は灰色、059は暗褐色を呈す。

S B 30 (第16図)

調査区南西のC-D-3区に位置し、SK35と重複している。平面プランはコの字状であるが、北東コーナーは丸くなり、北西コーナーは鋭角に突出している。主軸はN 5°Eで、規模は検出面で長軸6.35m、短軸3.8m、床面で長軸6.1m、短軸3.5m、壁高20cmを測る。床面は中央及び東半が高くなっている。壁溝・柱穴は検出されなかった。住居跡内の床面や周辺部より須恵器・土師器が集中して出土した。

遺物 (第23・28図)



第 16 図 SB30~32, SK35 断面図 (1 : 60)

須恵器

坏蓋（060・061） 060は深いもので、口径14cm。天井部・体部は丸く、口縁部は短く直下し、口縁端部は丸く終わる。天井部外面は回転ヘラ切りで、体部との境には回転ヘラ削りがみられ、他は回転ナデである。ロクロの回転方向は時計回りである。胎土は1mm前後の砂粒を含みやや密、焼成は良好で、灰色を呈す。061は口径14cm。体部は直線的に外下方に下がり、口縁は短く直下する。内外面とも回転ナデ調整である。胎土は1～2mmの砂粒を多く含み粗、焼成は良好で、外面は黒色、内面は灰色を呈す。

坏身（062～064） 062は完形に近く深いもので、口径11.6cm、器高3.9cm。底部はほぼ平坦で、体部は丸く外上方へ伸び、立ち上がりは内傾気味に立ち、受部は外上方へ伸び、端部は上方へ丸く終わる。立ち上がりはオリコミ手法である。底部外面中央は回転ヘラ切りで、それより体部半分までは回転ヘラ削りで、内面中央には2方向のナデが見られ、他は回転ナデである。ロクロの回転方向は時計回りである。胎土・焼成も密・良好で、灰色を呈す。なお、SB31出土の破片と接合した。063は口径10.6cm。立ち上がりは短く内傾気味に立ち、受部は短く外上方へ伸びる。内外面とも回転ナデ調整、胎土・焼成とも良好で、灰色を呈す。064は浅いもので、口径10cm。底・体部とも丸味が少なく、直線的で、立ち上がりは短く内傾し、受部も短く外上方へ伸びる。底部まで回転ヘラ削り、他は回転ナデである。ロクロの回転方向は時計回りである。胎土は1～2mmの砂粒を含みやや粗、焼成は良好で、灰色を呈す。

把手（065） 角頭状を呈し、断面が扁平なもので、ナデているが、凹凸がある。

土師器

高坏（066） 坏部破片で、口径17cm。深いもので、口縁部は外上方へ伸び、端部は丸く終わる。非常にていねいにナデて平滑にしている。胎土は密、焼成は良好で、赤褐色を呈す。

石器

砾石（151） パチ形を呈するもので、長さ9.5cm、幅8.3cm、厚さ4.8cmを測る。4面を使用したと思われ、よく磨滅している。淡褐色を呈し、花崗岩質の流紋岩と思われる。

SB31（第16図）

調査区南西のC-3区に位置し、SB30と並んで存在する。上面が削平され、残存状態が非常に悪い。主輪は南北を向き、規模は検出面で長軸3.8m、短軸2m、壁高10cmを測る。壁溝・柱穴等は検出されていない、遺物は須恵器・土師器が多数出土している。

造物（第24図）

須恵器

坏蓋（067） 口径12.8cm。体部はなだらかに広がり、口縁部は短く直下し、口縁端部は丸く終わる。調整は回転ナデを用いている。胎土は砂粒をやや含み、焼成は良好で、灰色を呈す。

壺蓋（070） 口径9.6cm。小型、深めのもので、天井部・体部とも丸味を持ち、口縁部は一

且直下したものが、外反して終わり、口縁端部は丸い。天井部外面は回転ヘラ削り、内面は不定方向のナデで、他は回転ナデ調整である。胎土・焼成とも良好で、暗灰褐色を呈す。

坏身 (068-069) 068は大型のもので、口径14.6cm。体部は丸くなり、立ち上がりは内傾し、受部は短く外上方へ伸びる。体部より下半は回転ヘラ削り、他は回転ナデである。ロクロの回転方向は時計回りである。胎土は密、焼成は良好で、暗褐色を呈す。069は口径14.6cm。体部は丸く外上方へ伸び、口縁部はさらに外反している。体部以下はやや不調整であるが、他は回転ナデである。胎土は1~2mmの砂粒をやや含み、焼成は良好、淡灰色を呈す。

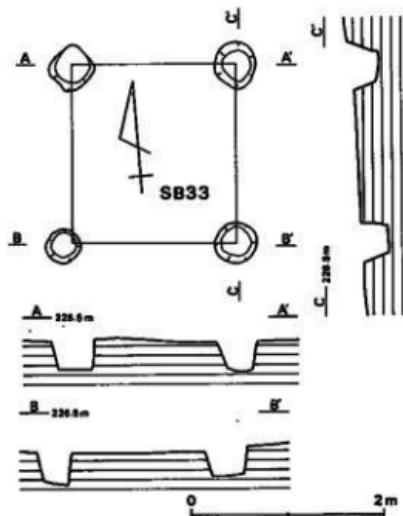
高坏 (071) 脚部はラッパ状に開くもので、内外面とも回転ナデで、坏底部内面は一定方向のナデである。胎土は細砂粒を含み、焼成は良好、暗灰色を呈す。

土師器

ミニアチュア製品 (072) 現存長2.2cm、径2.2cm。破損しているが、復元すると010と同様な形態と思われる。扁平に近い球形の両側に脚を付したような形態を呈しており、3つに分けて作り、接合してナデたものと思われる。胎土は細砂粒を含み密、焼成はやや不良、赤褐色を呈す。

S B 32 (第16図)

調査区西半のC-2・3区に位置し、平面プランはコの字状を呈す。主軸はN 9°Wで、規模



第 17 図 S B 33実測図 (1 : 60)

は検出面で長軸5.4m、短軸1.8m、壁高10cmを測る。壁溝は北側のみ存在し、幅35cm、深さ5cmである。北東コーナーの溝内より073が出土している。

遺物 (第24図)

須恵器

横振 (073) 体部下半を欠失したもので、口径12.6cm。体部は丸味を持つ橢円形で、頭部はくの字で、口縁部は大きく外反している。口縁端部は外側を肥厚させており、やや段をなしている。体部外面はタタキ後、カキメを施し、内面は同心円文が残っている。口縁部は内外面とも回転ナデである。胎土は密、焼成は普通で、灰色を呈す。

S B 33 (第17図)

D-3・4区に位置し、S B 30より東へ

3 mである。主軸はN 5°Eで、柱穴のみ4本検出された。柱穴の規模は径30~40cm、深さ25~30cmである。柱間距離は東西1.7m、南北1.9mである。この付近は上面の削平がいちじるしいので当初より4本柱等の掘立柱建物であったのか、他の住居跡同様、斜面上方をコの字に削平したものかは不明である。

S B40 (第9図)

S B09内に存在しており、壁溝の一部が残存するのみである。溝は北東コーナーと東辺が検出され、規模は幅15cm、深さ5cm、南北長1.4mを測る。それに関連すると思われる柱穴が1本検出されている。新旧関係はS B40→S B09である。

S B41 (第7図)

調査区南西のB-2・3区に位置し、S B06の南半に柱穴が3本だけ検出された。柱穴の規模は径40cm、深さ15cmである。軸はN82°Wで、柱間距離は東から1.4m、1.9mである。おそらく1間×2間程度の掘立柱建物があったものと思われるが、上面の削平がいちじるしいので判然としない。S B06との新旧関係は不明である。

B. 土塁

S K01 (第18図)

調査区東端のH-I-3区に位置し、S K02より南東へ1mである。隅丸長方形の土塁で、主軸はN78°E、規模は検出面で1.7×0.6m、深さ10~20cmを測る。西半がやや幅広で浅くなっている。埋土は黒褐色土で、遺物は出土していない。

S K02 (第18図)

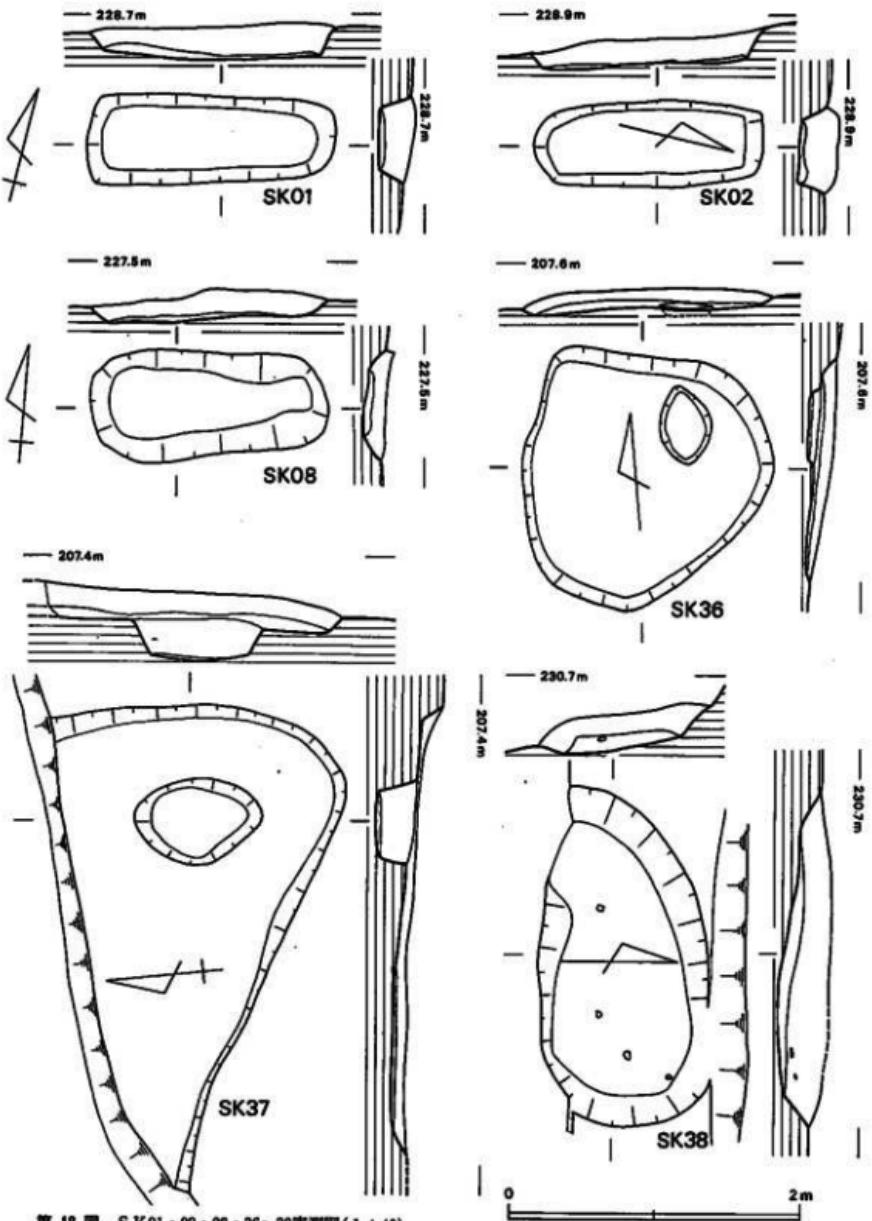
調査区東端のH-3区に位置し、S K01より北西へ1mである。平面プランは隅丸長方形を呈し、主軸はS K01と直交したN13°W、規模は検出面で1.55m×0.6m、深さ10~20cmを測る。埋土は黒褐色土で、遺物は出土していない。

S K08 (第18図)

調査区西端のB-2区に位置し、S B07より南へ4mである。平面プランは隅丸長方形を呈し、主軸はN85°E、規模は検出面で1.62×0.75m、深さ20cmを測る。床面は東半がやや狭くなっている。埋土は黒褐色土で、遺物は出土していない。

S K15 (第9図)

C-2区に位置し、S B14の溝内より検出された。溝に沿って存在し、平面プランは梢円形



第18図 SK01・02・08・36～38実測図(1:40)

を呈し、規模は検出面で 1.7×0.8 m、深さ10cmを測る。主軸はN83°Wである。埋土は暗褐色土で、土師器の破片が少量出土した。新旧関係は土層観察によるとSB14→SK15である。

SK16 (第9図)

C-2区に位置し、SB14の住居跡内に構築されている。平面プランは円形で、径1m、深さ40cmを測る。新旧関係はSB14→SK16である。

SK18 (第7図)

調査区西端のB-2区に位置し、SB06と重複している。平面プランは隅丸長方形で、主軸はほぼ東西を向き、規模は検出面で 1.8×1 m、深さ12cmを測る。南西隅には径30cm、深さ8cmのピット状の穴が存在する。SB06との新旧関係は不明である。

SK20 (第10図)

調査区中央のE-3区に位置し、SB21、SK22と重複している。北東部が試掘トレンチで削平されているが、椭円形プランのものと思われる。規模は検出面で 4×3.6 m、深さ15cmを測る。埋土は黄灰色土、茶褐色土、暗黄灰色土で、須恵器・土師器・磁石等多数出土している。新旧関係はSK20→SB21→SK22である。

遺物 (第24・28図)

須恵器

壺蓋 (074) 口径15cm。体部は直線的に外下方へ伸び、口縁部は短く直下している。体部より上の外面はヘラ削り、内面は不定方向のナデ、他は回転ナデである。胎土は1mm前後の砂粒を多く含み、焼成は普通で、淡灰褐色を呈す。

壺身 (075~077) 075は口径13.8cm。やや扁平なもので、立ち上がりは内傾気味に立ち受部も外上方へ伸び、端部はいずれも丸く終わる。底部及び体部外面は回転ヘラ削り、底部内面はナデ、他は回転ナデ調整である。クロロの回転方向は時計回りである。胎土は1mm前後の砂粒をやや含み、焼成は良好で灰色を呈す。076は口径12.4cm。体部は直線的で、立ち上がりは内傾後直立し、受部は外上方へ伸びる。底部外面は回転ヘラ切り離し後、未調整で、他はすべて回転ナデである。胎土は1mm前後の砂粒を含みやや密で、焼成は良好、灰色を呈す。077は口径11.4cm。底部は平坦で、体部は丸味を持ちながら伸び、立ち上がりは短かく内傾し、端部はやや尖り気味に終わり、受部は短く外上方へ伸びる。底部外面は回転ヘラ切り、他は回転ナデである。胎土は1mm前後の砂粒を含みやや密で、焼成は良好で、外面は灰色、内面は暗灰色を呈す。

高壺 (078) 壺底部片で、底部外面はカキメ、体部下半の外面はヘラ削り、壺内面は回転ナデである。胎土は1mm前後の砂粒を多く含みやや粗、焼成は良好で、灰色を呈す。

石器

砾石 (146・147) 146はややバチ形を呈するもので、現存長4.9cm、幅3cm、厚さ3.2cmを測る。下半を欠失している。4面を使用したものと思われ、そのうち1面には条痕が顯著に残っている。褐色がかかった白色を呈し、花崗岩質の流紋岩で、仕上砥である。147は上下両方を欠失したもので、現存長2.3cm、幅3.9cm、厚さ2cmを測る。4面を使用しており、淡褐色を呈し、花崗岩質の流紋岩で、仕上砥である。

S K 22 (第10図)

調査区中央のE-2区に位置し、S B21、S K20と重複している。東半は試掘トレンチで削平されているが、梢円形に近いプランの土塹と思われる。現状での規模は $1.45 \times 1.1m$ 、深さ40cmである。埋土は黄褐色土・暗黄褐色土である。遺物は須恵器・土師器が少量出土している。新旧関係はS K20→S B21→S K22である。

S K 23 (第10図)

調査区中央のE-2・3区に位置し、SB21内に構築されている。梢円形プランで、規模は検出面で $1.1 \times 0.6m$ 、深さ30cmを測る。埋土は暗褐色土・褐色土で、須恵器が出土している。

遺物 (第24図)

須恵器

环身 (080) 口径10.6cm。立ち上がりは内湾しながら直立し、端部は尖って終わり、受部は外上方へ伸び、端部は上方へ丸く終わる。内外面とも回転ナデ調整である。2~3mmの砂粒を多く含み粗、焼成は良好で、灰色を呈す。

甕 (081) 口径14.8cm。頸部はくの字に屈曲し、口縁部は直線的に外反している。口縁端部は外側に肥厚させ、段状になっている。内外面とも回転ナデ調整である。胎土・焼成とも良好で、暗灰色を呈す。

S K 24 (第10図)

調査区中央のD・E-2区に位置し、S K23と並んで存在する。平面プランは梢円形で、規模は $0.88 \times 0.5m$ 、深さ20cmを測る。埋土は暗褐色土で、須恵器が出土している。

遺物 (第24図)

甕 (082) 体部片である。やや肩の張るもので、最大腹径付近に一条の凹線がめぐっている。円孔も凹線上にあり、外より穿たれている。胎土は2~3mmの砂粒を多く含み粗、焼成は良好で、淡灰褐色を呈す。

S K 25 (第9図)

調査区西半部中央のC-2区に位置し、S K15と並んで存在している。平面プランは梢円形

で、規模は 0.94×0.64 m、深さ10cmを測る。床面は平坦である。埋土は暗褐色土で、土師器が出土している。

S K 34 (第12図)

調査区北西のD-1・2区に位置し、S B19の貼床下に存在していた。平面プランは不整な形をしており、規模は 4×3.2 m、深さ30cmを測る。土師器が出土している。

遺物 (第24図)

土師器

甕 (083) 口径13.8cm。体部は肩の張らないやや長胴で、口縁部は短くわずかに外反している。内外面ともにナデている。胎土は1~2mmの砂粒をやや含み、焼成はやや不良、淡黄褐色を呈す。

S K 35 (第16図)

調査区南西のD-3区に位置し、S B30と重複している。平面プランは橢円形を呈し、規模は 1.1×7.4 m、深さ15cmを測る。土師器が出土している。

S K 36 (第18図)

調査区南東のG-4区に位置し、S K37より東へ3mである。平面プランは不整な円形で、径1.7m、深さ10cmを測る。床面は北より南に向かってやや傾斜しており、北東部には径40cmの円形のピット状の穴がある。遺物は須恵器・土師器が少量出土している。

S K 37 (第18図)

調査区南東のF・G-4区に位置し、東西の試掘トレーニによって北半を削平されており、L字状のコーナーが残るのみである。規模は検出面で 3.2×2 m、深さ10cmを測る。土壌内の東半には 45×30 cmのピット状の穴があり、深さは25cmである。遺物は須恵器・土師器が出土している。

S K 38 (第18図)

調査区北端のE・F-1区に位置し、S B26より北東へ4mである。平面プランは橢円形で、規模は検出面で 2.3×1.2 m、深さ20cmを測る。床面は西より東に向かってやや傾斜している。遺物は土師器とともに弥生式土器の底部が出土している。

S K 42 (第7図)

調査区北西のC-1区に位置し、S B05より東へ0.5mに存在する。平面プランは不整な円形

を呈し、径65cm、深さ30cmを測る。

C. 溝

S D39

調査区北西のD-0・1、E-1区に位置し、東半はS B26・27と重複している。S B19の北方を等高線に沿って直線的に伸びており、方向はN85°Wである。規模は長11.5m、幅(西側)0.6m、(中央)1m、(東側)0.7m、深さ30cmを測る。新旧関係はS D39→S B26→S B27である。この溝はS B11・21あるいはS B17・29の壁溝と類似する立地・構造を持つものとも考えられるが、床面は平坦な部分がまったくなく、S B19と関連して土止めの溝としたほうがいいようである。遺物は土師器が少量出土した。

D. その他の遺物

微地形の谷部を中心に良好な遺物包含層があり、これより須恵器・土師器をはじめ砥石・石鐵・尖頭器・石斧等多数が出土した。須恵器・土師器・砥石は検出された遺構に伴う遺物とはば同時期であり、住居跡等から転落したものと思われる。石鐵・尖頭器・石斧等と同時期の遺構は検出されていない。

遺物（第25～29図）

須恵器

坏蓋（084～089） 2類に分けることができる。1類（085・086・088）はほぼ平坦な天井部からなだらかに丸味を持って外下方に下がり、口縁部は短く直下し、端部は丸く終わる。天井部外面は回転ヘラ切り、それより体部 $\frac{1}{2}$ mまでは回転ヘラ削り、他は回転ナデである。085は口径13.2cm、体部と口縁部の境に稜がつくもので、胎土は粗、焼成は良好で、灰色を呈す。086は口径13.4cm、器高4.3cm。ロクロの回転方向は時計まわりで、胎土はやや粗で、焼成は良好、外面は黒灰色、内面は灰色を呈す。外面に坏片が2点接着している。088は口径13cm、器高4cm。胎土・焼成とも良好で、灰色を呈す。

2類（084・087・089）は天井部・体部とも丸味を持ち、口縁部も内湾気味に外下方へ下がるもので、焼を逆さにした形に似ている。現存破片では天井部と体部の境に回転ヘラ削り、他は回転ナデである。084は口径14cm。胎土・焼成ともに良好で、灰色を呈す。

高坏蓋（093） 天井部・体部は丸味を持ちながら大きく広がり、口縁部が直下し、端部は欠失している。口縁部と体部の境には凹線が入る。天井部には扁平なつまみが付いている。天井部外面はヘラ削り後つまみを接合してナデしている。内面は不定方向のナデで、他は回転ナデ調整である。胎土はやや砂粒を含み、焼成は良好で、外面は灰色、内面は暗灰色を呈す。

壺蓋（090～092） 天井部はほぼ平坦で広く、体部は大きく内湾し、口縁部は内下方に下がり、端部は内傾させ、内外に肥厚させている。天井部外面は回転ヘラ切り、体部上半は回転ヘ

ラ削り、他は回転ナデである。090は口径13.6cm。胎土は1~2mmの砂粒を含み、焼成は普通で、灰色を呈す。091は口径11.4cm。胎土・焼成・色調とも090と同様である。092は口径10.8cm。前二者とタイプの違うもので、口縁部は外下方に下がり、端部は丸く肥厚させている。胎土は微細砂を含み密、焼成は良好で、淡灰色を呈す。

坏身 (094~114) 4類に分けることができる。

1類 (094・097・101・104~106) は底部がほぼ平坦で、体部は直線的に外上方へ伸びており、やや深めのものである。立ち上がりはオリコミ手法によるもので、内面には明瞭な沈線を有している。立ち上がりは内傾しているもの (97・104・105) と内傾後直立するもの (94・101・106) がある。受部は短く外上方へ伸びるのがほとんどで、水平なもの (101) もある。端部はいずれも丸く終わる。底部・体部には回転ヘラ切り・回転ヘラ削りが見られ、他は回転ナデ調整である。ロクロの回転方向は時計回りである。094は口径13.8cm、器高4.2cm。底部外面は回転ヘラ切り、体部との境は回転ヘラ削り、内面は一定方向のナデ、他は回転ナデである。胎土は密、焼成はやや不良で、淡灰色を呈す。097は口径12.8cm、器高3.9cm。底部は広く平坦、体部は直線的に伸びるもので、底部外面は回転ヘラ切り、他は回転ナデである。胎土はやや砂粒を含み、焼成は良好で、暗灰色を呈す。104は口径12cm。薄手で、体部がやや丸くなる。現存破片では回転ナデのみである。胎土は1mm前後の砂粒を含み、焼成は良好で、灰色を呈す。

2類 (096・099・100・107・109・110) は概して浅く、底部・体部とも丸味を持つ。立ち上がりはいずれも短く内傾するもの (100・107) と内湾気味に立つもの (96・99・109・110) がある。受部は外上方へ伸びるもの (096・099・107・109) と内湾気味に立つもの (100・107) がある。後者は立ち上がりとの間がUの字状の溝になる。底・体部外面には回転ヘラ切り、回転ヘラ削りを行い、他は回転ナデ調整である。ロクロの回転方向はすべて時計回りである。096は口径12.8cm。底・体部とも丸く、立ち上がり、受部とも短く、その間は半円状を呈する。底部外面は回転ヘラ切り、他は回転ナデである。胎土は1~2mmの砂粒を多く含み粗、焼成はやや不良で、淡灰褐色を呈す。100は口径12.2cm。胎土は粗、焼成は良好で、淡灰色を呈する。

3類 (095・098・102・103・108・111) は底部は広く平坦で、体部は丸く広がり、立ち上がりはハリツケ手法である。立ち上がりが内傾するもの (095・098・103・108) と直立するもの (102・111) があり、いずれも厚い。受部は外上方に伸びるもの (095・098・102・103) と水平に伸び、断面が三角形になるもの (102・111) がある。底部・体部の外面は回転ヘラ切り・回転ヘラ削り、他は回転ナデである。ロクロの回転方向は時計回りである。102は口径12cm。胎土は1~2mmの砂粒を多く含み、焼成はやや不良で、淡灰褐色を呈す。他のものは胎土は1mmの砂粒を含み、焼成は良好で、色調は灰色を呈す。

4類 (112~114) は単純口縁のものである。112は口縁部が外反するもので、底部と体部の境に凹線が入る。胎土は砂粒をやや含むもので、焼成は良好で、灰色を呈す。113は深いもので、体部は丸く、口縁部は外反している。底部外面は回転ヘラ切り、体部上半は回転ヘラ削り、内

面中央は一定方向のナデ，他は回転ナデである。胎土は2mmの砂粒をやや含み，焼成は普通で，淡灰色を呈す。114は口縁部が直線的に伸びるもので，端部は丸く終わる。胎土は2mmの砂粒を多く含み，焼成は良好で，灰色を呈す。

高坏（115～123） 坏部片は116のみである。116は底部は平坦で，口縁部は外反し，端部は丸く終わる。体部下半には一条の凸帯を有す。底部外面は回転ヘラ削り，他は回転ナデである。脚部片には低いもの（115・117・120・121）と高いもの（118・119）がある。低いものはラッパ状に開くもので，内外面とも回転ナデである。高いものは透し窓のあるもの（118）とないもの（119）がある。118は2段の透し窓があり，上段は幅1mmと形骸化し，下段は幅5mmの台形で，その間には1条の凹線がめぐる。119は筒部中央に凹線が一条めぐり，裾部はラッパ状に広がる。脚裾部片の120はラッパ状に広がったものが稜をもって水平に折れ曲がり，端部は下方に引き伸ばしている。123はラッパ状に広がり，端部は内外に肥厚させている。

塊（124） 口径14.8cm。半円形を呈するもので，外面には3条の凹線がめぐる。口縁端部は内傾気味に角ばって終わる。内外面とも回転ナデ調整である。

甕（125～133） 小型のもの（125～127），大型のもの（129～133），直立口縁のもの（128）がある。小型のものは口縁部が大きく外反し，端部は外側に肥厚させ，丸くなっている。内外面とも回転ナデ仕上げである。口径13～14cm。大型のものは口縁部が直線的に外反している。口縁端部は外側に肥厚させ，丸くなるもの（129・132），角ばるもの（130・131・133）がある。体部外面はタタキメ，内面は同心円文が残り，口縁部は回転ナデである。

土器

甕（134・135） 頸部はくの字に屈曲し，口縁部は外反している。134は体部外面はハケメ，内面はヘラ削り，口縁部はヨコナデがみられた。

石器

尖頭器（136） 両端部を欠き，全長9.3cm，幅3.6cm，厚さ3cm，重量107gを測る。全体に風化が著しく，剥離面相互の関係は不明である。両面加工で菱形を呈し，中位では著しく肥厚し，側辺の角度も純くなり，基部付近で比較的薄く仕上げられている。流紋岩であろう。

石斧（137・138） ともに柱状の自然礫を用い，刃部及び頭部以外は自然面を多く残す。半折（137），刃部欠損（138）後も再び使用されている。137は左図左側辺に，138は左図平坦面に，研磨面様な平坦面もしくは擦痕をとどめる。137は全長8.4cm，幅5.1cm，厚さ1.9cm，重量128.7g。138は全長11.5cm，幅5.7cm，厚さ2.4cm，重量242.2gを測る。淡乳灰青緑色を呈している。

削器（139・140） 139は自然面を打面とする剝片の一辺に鈍角気味のリタッチを施したもので，下縁辺には刃こぼれ状の使用痕も観察される。全長4.4cm，幅5cm，厚さ0.4～0.7cm，重量19gを測る。安山岩である。140は縁辺部を折損するが，現存部分は使用痕がめぐる。下辺部に自然面を残し，一部に主要剝離面からのリタッチをとどめる。乳灰褐色を呈す頁岩製である。

スボール（141） 全長3.4cmで下端を欠く。安山岩製である。

残核(142) ブロック状の剝片で、原縁外表部の一部である、重量28.1gを測る、安山岩製である。

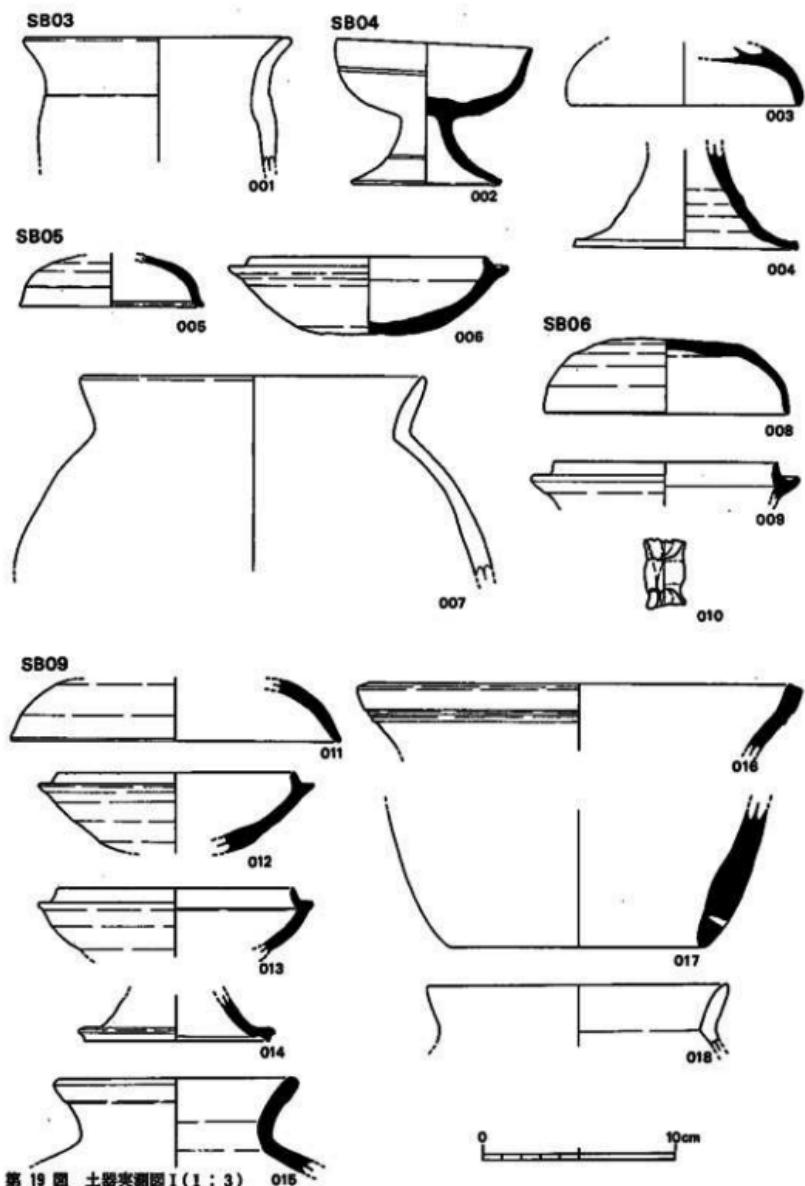
石鎌(154～166) その形態から縄文時代早期頃と弥生時代に属すると思われるものに大別される。前者は157, 158, 163、後者は155, 160, 166等があてられようが、正確な時期の判定は成し得ない。石材は161の姫島産黒曜石に酷似するものを除いて全て安山岩の石材が用いられ、表裏中央部に素材剥離面を残置するものと全面にリタッチを施されるものがある。

これらの石器群は調査区において時期的な把握は成し得なかったが、尖頭器はプロポーションなどから旧石器時代末頃に石斧、削器、石鎌の一部は縄文時代早期前後に位置づけられよう。

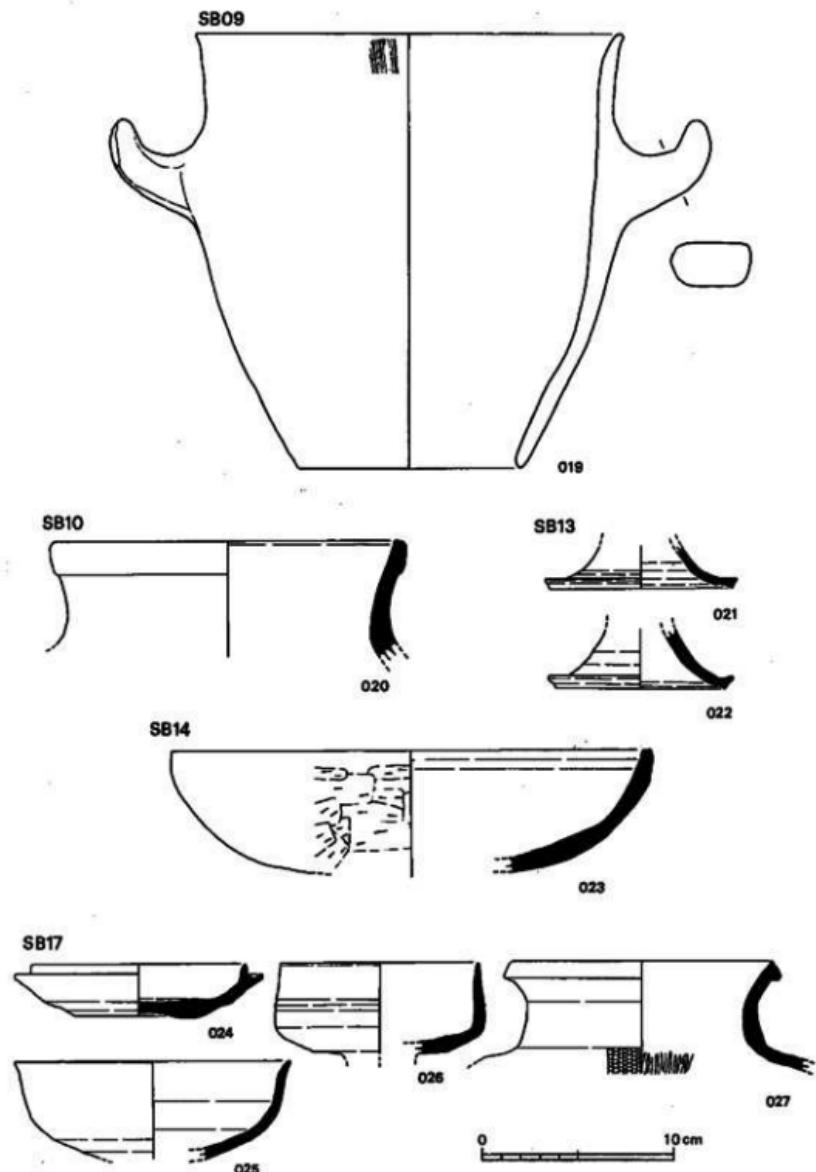
砥石(149・150・152・153) 149・150・152はややバチ形を呈するもので、152は大型である。149は現存長6cm、幅4.2cm、厚さ2cmを測る。下半を欠失している。よく磨かれ擦痕が見られる。150は現存長2.9cm、幅3.2cm、厚さ2.6cmで上下の両方とも欠失している。152は、現存長3.8cm、幅8.5cm、厚さ4.2cmで上下両方とも欠失しており、擦痕が顕著であった。いずれも4面を使用しており、淡褐色を呈し、半花崗岩質の流紋岩で、仕上砥である。153は現存の長さ8.2cm、幅9cm、厚さ6.1cmで、三面を欠失しており、原形がわからないが、2面を使用していたものと思われる。淡灰色～暗灰色を呈す。

その他の遺物出土位置一覧表

遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点	遺物番号	出土地点
084	E-4区	103	D-2区土器留り	122	D-2区土器留り	141	E-2区SB04
085	表 採	104	E-2区	123	表 採	142	D-1区SB19
086	B-2区	105	D-3区	124	D-2区土器留り	149	予備調査
087	D-2区土器留り	106	F-2区	125	D-4区	150	表 採
088	E-2区	107	G-4区	126	D-2区土器留り	152	D-4区
089	D-2区土器留り	108	表 採	127	D-3区	153	表 採
090	G-4区	109	F-2区	128	E-3区	154	B-3区
091	G-4区	110	F-2区	129	E-4区	155	B-3区
092	表 採	111	表 採	130	E-3区	156	B-3区
093	D-2区土器留り	112	D-4区	131	表 採	157	B-3区
094	B-2区	113	E-1区	132	D-2区土器留り	158	C-1区SB05
095	D-3区	114	F-3区	133	表 採	159	C-2区SB13
096	F-3区	115	予備調査	134	A-3区	160	C-4区
097	B-2区	116	C-4区	135	E-3区	161	D-1区SB19
098	D-4区	117	F-2区	136	F-3区	162	D-1区
099	D-2区土器留り	118	予備調査	137	E-4区	163	D-1区
100	D-2区土器留り	119	D-2区土器留り	138	D-3区SB30	164	D-2区
101	E-4区	120	D-2区土器留り	139	D-1区SB19	165	E-3区
102	D-2区土器留り	121	D-2区土器留り	140	E-1区SB27	166	E-4区

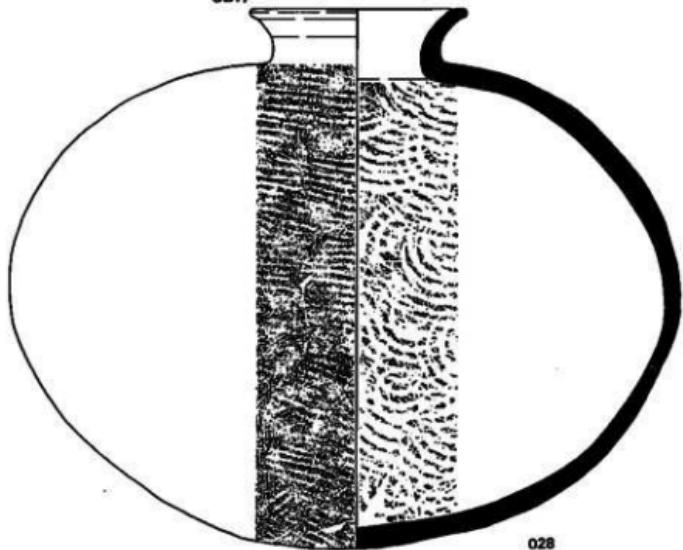


第19圖 土器実測図 I (1 : 3)
 (SB03-001, SB04-002~004, SB05-005~007, SB06-008~010, SB09-011~018)



第 20 図 土器実測図 II (1 : 3)
(S B09-019, S B10-020, S B13-021・022, S B14-023, S B17-024～027)

SB17

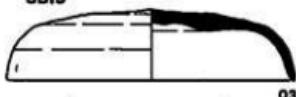


028

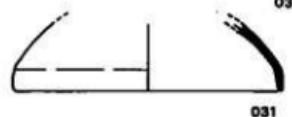
029

030

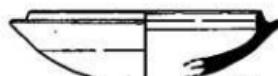
SB19



030



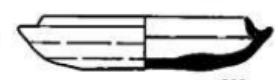
031



034



035



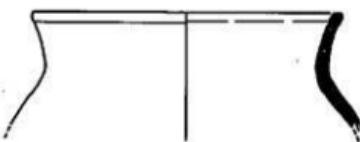
036



032



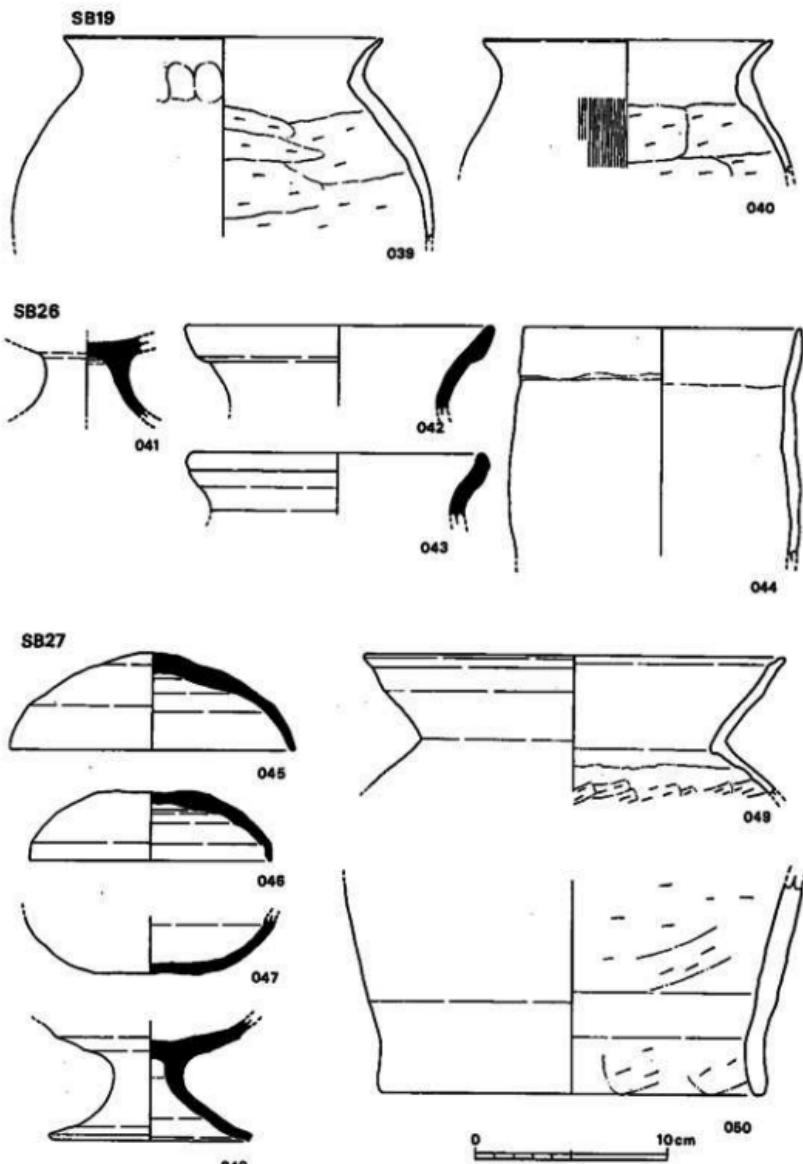
033



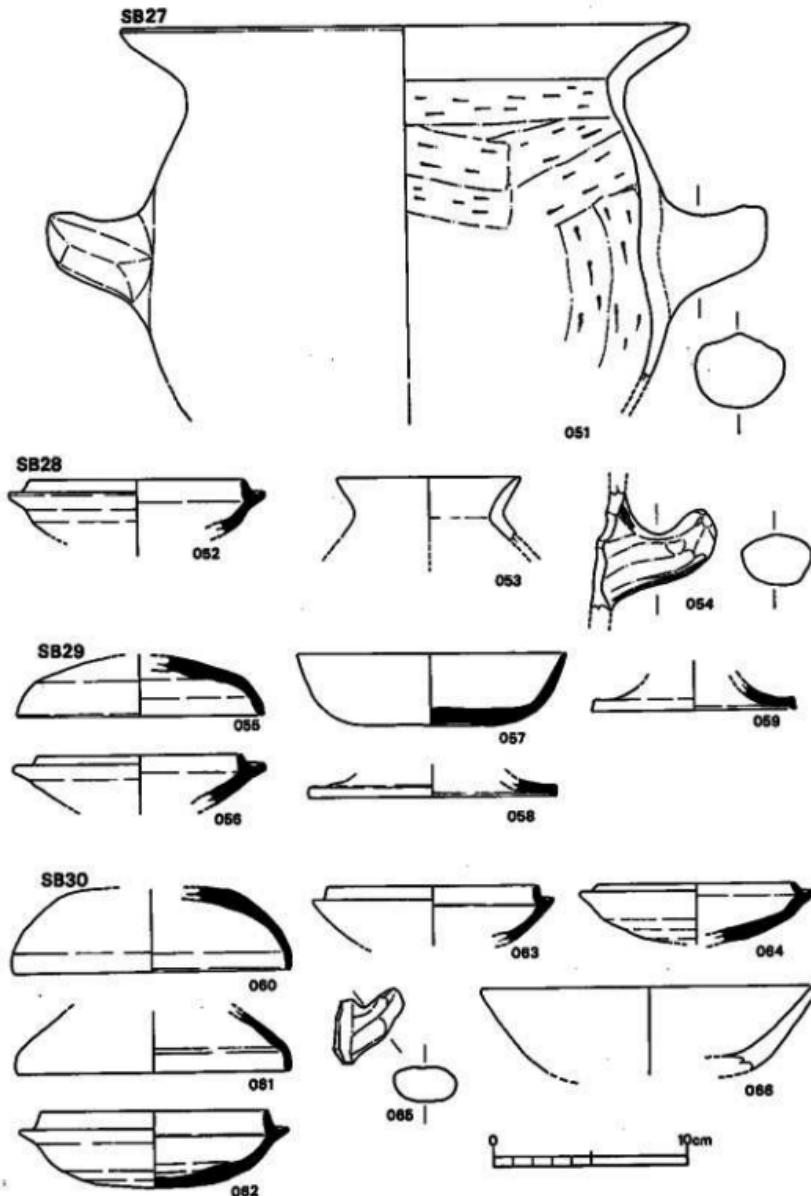
038

0 10cm

第 21 圖 土層剖面圖III (1 : 3)
(S B17-028 ~ 029, S B19-030 ~ 038)

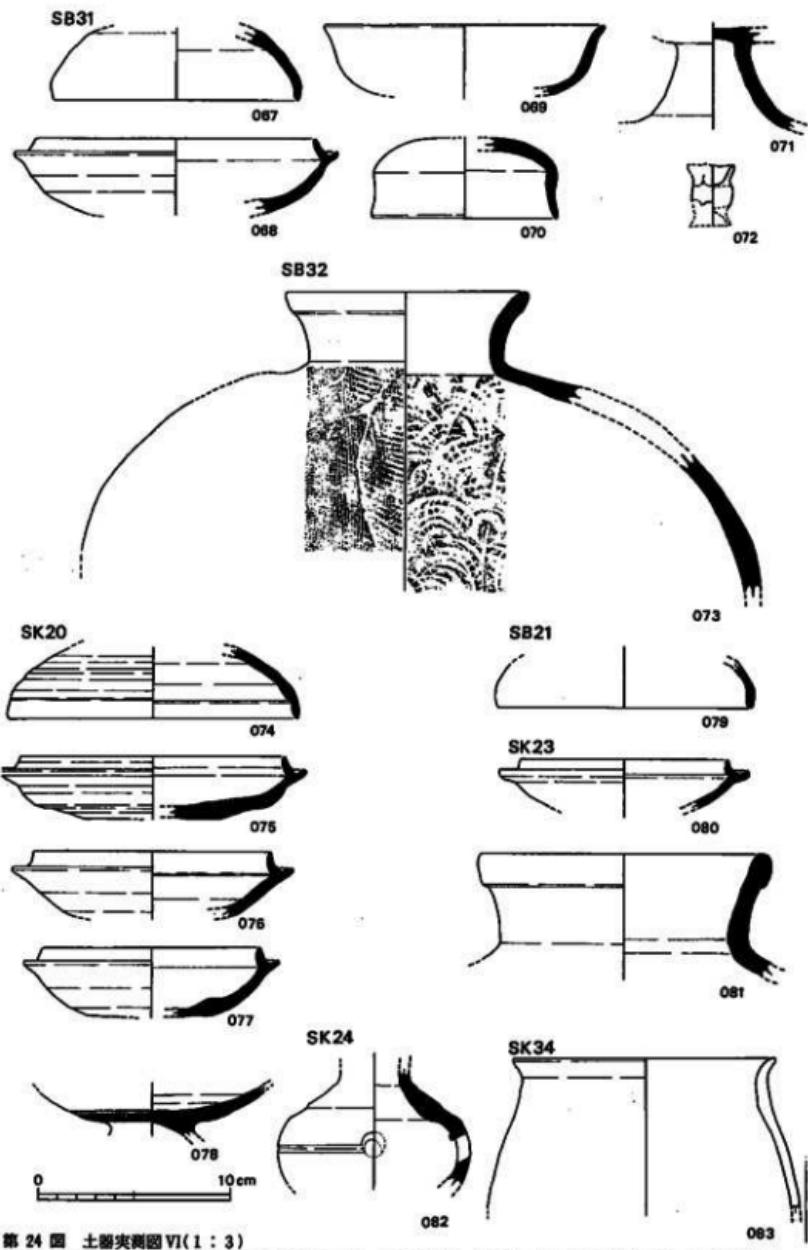


第 22 図 土器実面図 W (1 : 3)
(SB19-039・040, SB26-041~044, SB27-045~050)



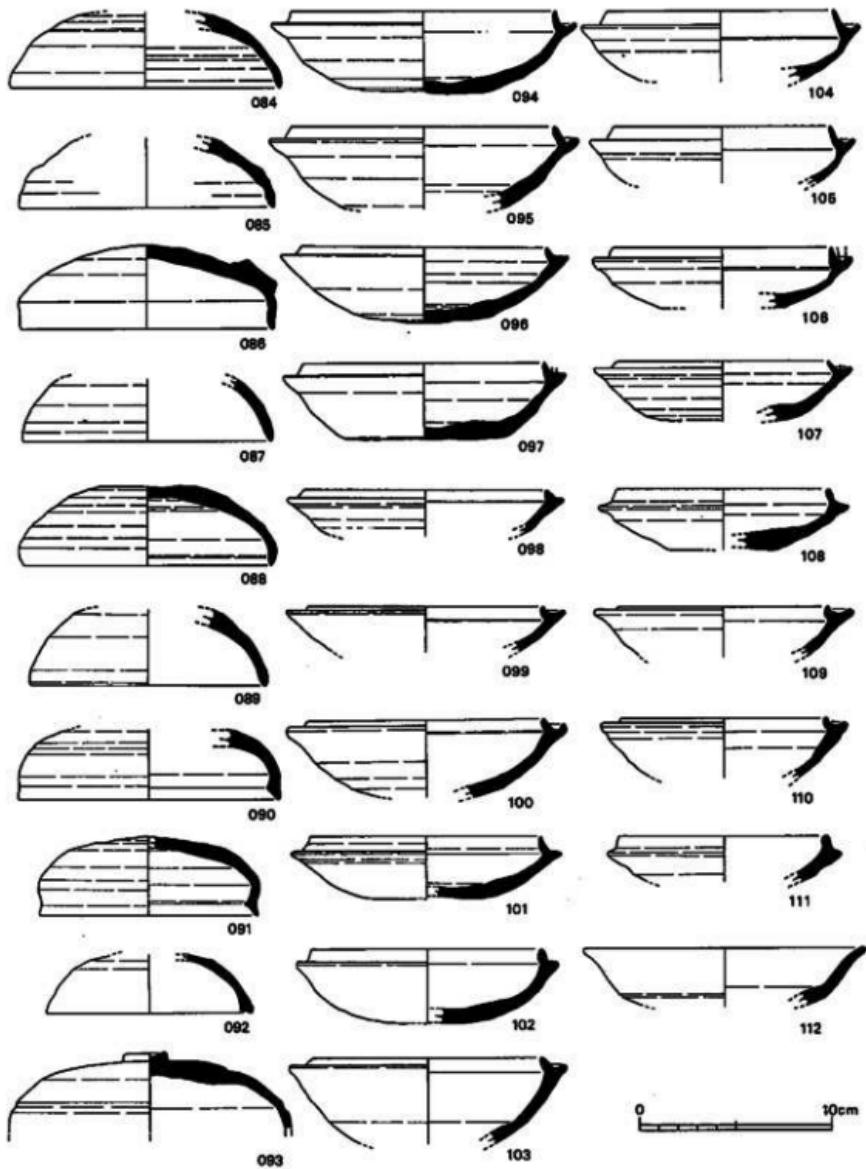
第 23 國 土器実測図 V (1 : 3)

(SB27-051, SB28-052~054, SB29-055~059, SB30-060~066)



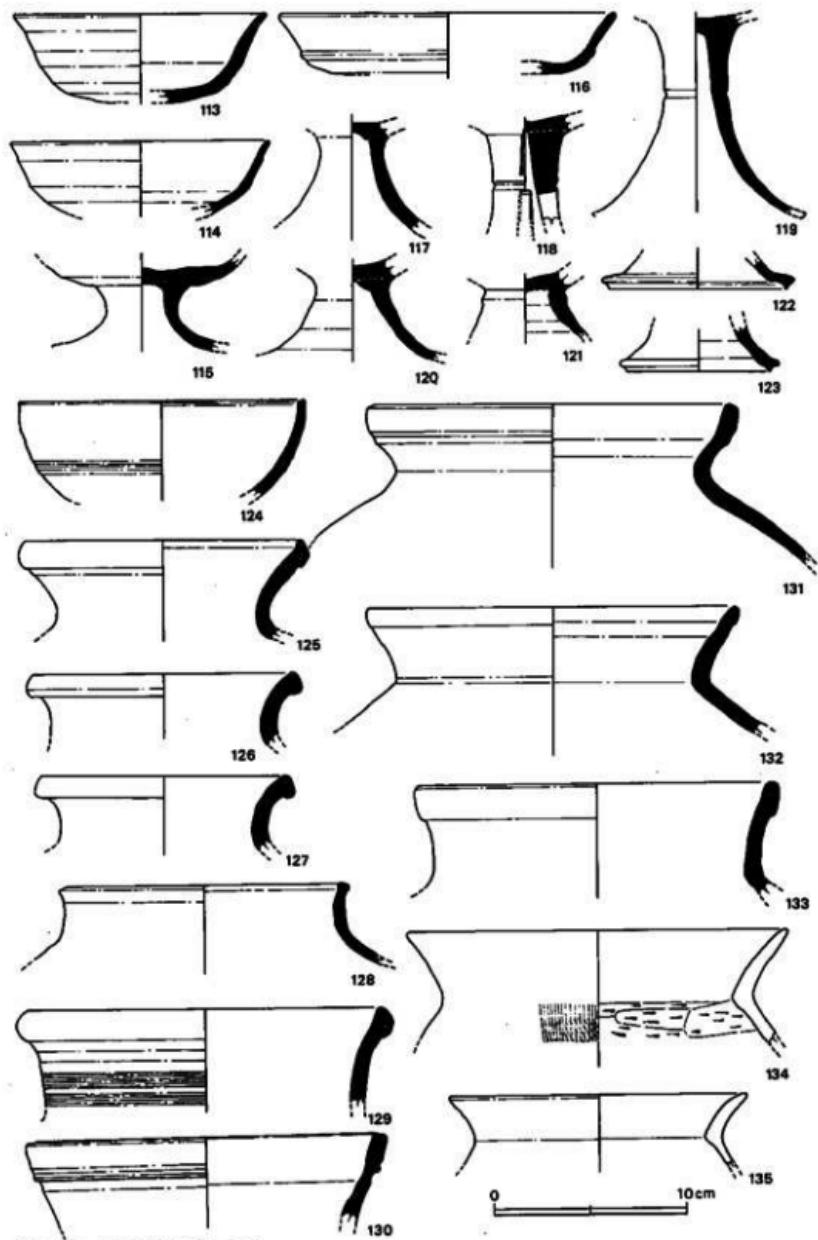
第24圖 土器実面図VI(1:3)

(SB31-067~072, SB32-073, SK20-074~078, SK21-079, SK23-080~081, SK24-082, SK34-083)



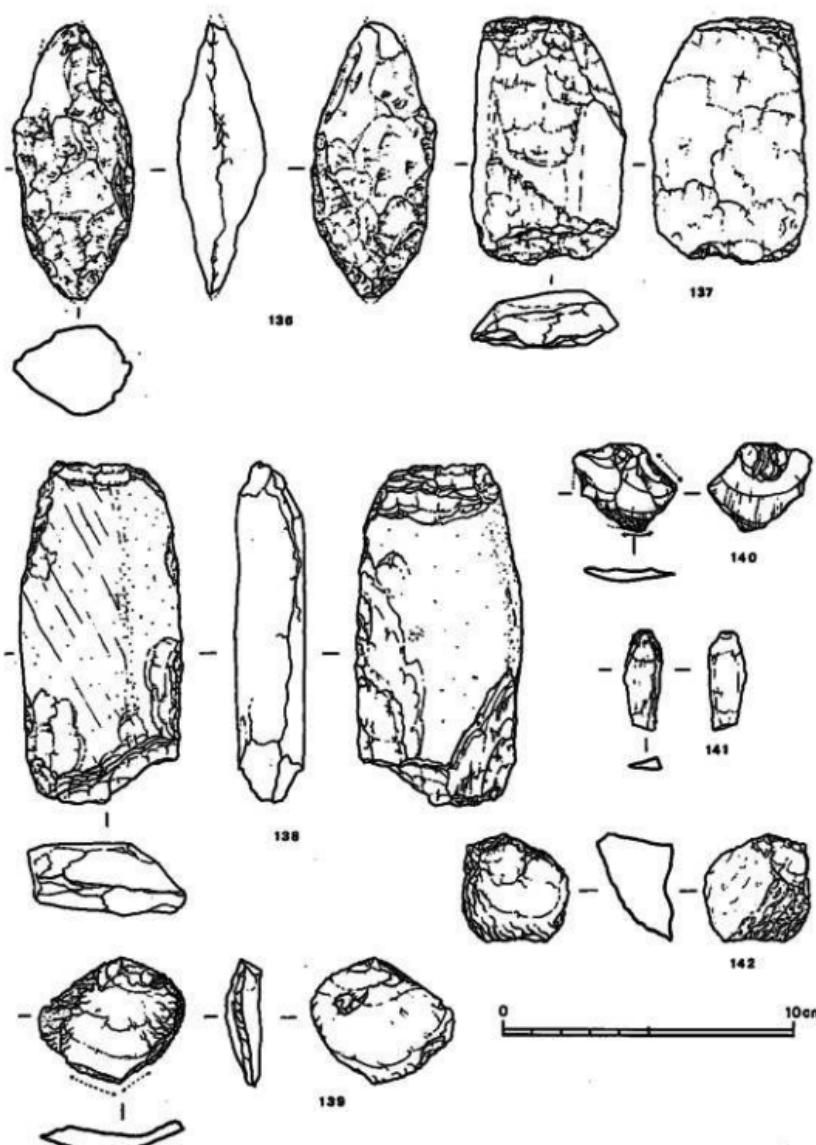
第 25 図 土壌実測図 VII(1 : 3)

(B-2区-086・094・097, D-2区-087・089・093・099・100・102・103, D-3区-095・105, D-4区-098・112,
E-2区-088・104, E-4区-084・101, F-2区-106・109・110, F-3区-096, G-4区-090・091・107,
表探-085・092・108・111)



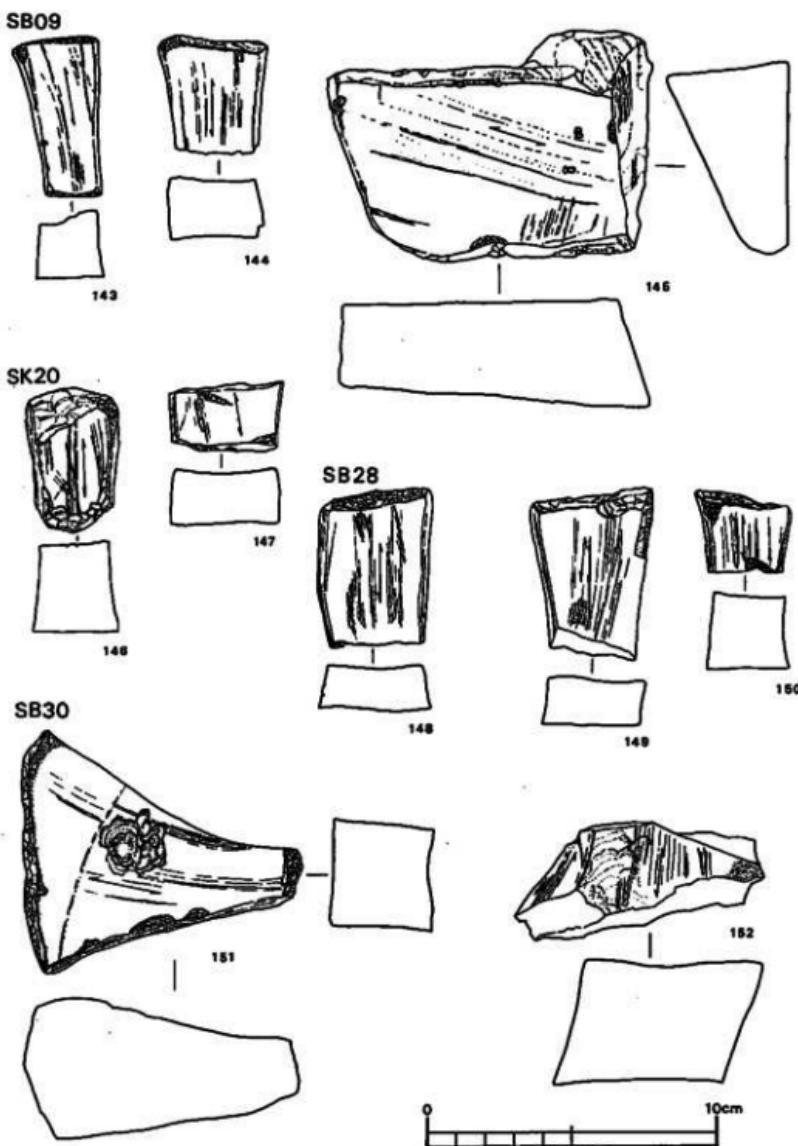
第 26 図 土器実測図 (1 : 3)

(A-3区-134, C-4区-116, D-2区-119~122・124・126・132, D-3区-127, D-4区-125, E-1区-113,
E-3区-128・130・135, E-4区-129, F-2区-117, F-3区-114, 破片-123・131・133,
予備調査-115・118)



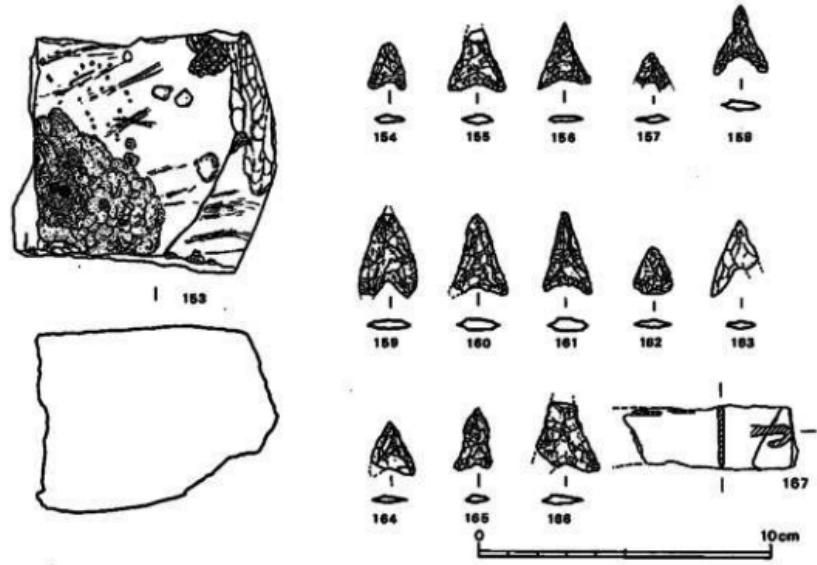
第 27 図 石器実測図 I (1:2)

(D-1区-139-142, D-3区-138, E-1区-140, E-2区-141, E-4区-137, F-3区-136)



第 28 図 石器実測図 II (1 : 2)

(SB09-143~145, SB28-148, SB30-151, SK20-146・147, D-4区-152, 表探-150, 予備調査-149)



第29図 石器・鉄器実測図(1:2)

(B-3区-154~157, C-1区-158, C-2区-159, C-4区-160, D-1区-161~163, D-2区-164,
(E-3区-165, E-4区-166, 表探-153, SB26-167)

V. ま　と　め

平木池遺跡の発掘調査を通じいくつかの成果を得たので、それを概略してまとめにかえたい。

まず旧石器時代～弥生時代の遺物はいずれも遺物包含層や住居跡内の流入土という2次堆積土中より出土したもので北方より流れ込んだと思われる。旧石器時代の遺物は西条盆地で初めてであり、隣接地域にも存在することから、旧石器時代にはすでにこの地で人間が生活して、その後も断絶期はあるものの生活の場としてきたものと思われる。

次に古墳時代の集落は住居跡・建物跡・土塁より構成されており、遺物も多数出土し、その全容がほぼ明らかとなったので、住居跡・建物跡の構造や集落の立地、構造等について言及してみる。

住居跡・建物跡はその構造・機能等によって3つのグループに分けることができる。

1グループは一般的な竪穴式住居跡であり、明確なものとしてSB03～05・07・19・26があげられる。斜面に立地している為、コの字状の正方形(SB07・19)と長方形(SB03～05・26)を呈しており、丘陵斜面の上方を削平し、下方に盛土・貼床を行って平坦面を作り出している。前者はやや大型で、一辺6m、面積約36m²ほどの規模で、特にSB19から多数の須恵器・土師器が出土している。後者は小型で、4×3m、面積約12m²ほどの規模で、前者と比べると面積が三分の一になっている。プランと規模には相関関係があるものと思われ、上屋構造もやや異なっていた可能性がある。

柱穴は4本のもの(SB03・07・26)と3本のもの(SB04)とがある。SB05・19の柱穴は現状では不明確であったが、元来4本であったのかもしれない。SB04は東半に1本、西半のカマドの両側に2本とやや変則的な3本柱であり、カマドの特異性と相まって考えなくてはいけないと思われる。壁溝はあるものの(SB03～05・07)とないもの(SB19・26)がある。造り付けのカマドはほとんどのものに存在すると思われ、明確でなかったSB03・07も焼土等が存在し、元来存在した可能性が高く、住居にカマドの付設が普遍的に成されていたと思われる。カマドはSB05・19・26のように、住居構築時にすでにその位置を決め(北辺のやや東より)窓体部は、粘土を用いて造っているのが普通のよう、SB19では立石を袖部に使っている。粘土は精良でなく、構造も簡単なものである。三次市松ヶ迫遺跡群ではカマドに石を使うのが一般化しており、本遺跡のものは抜き取られた可能性もある。煙道部はトンネル式が主流であったと思われるが、SB19・26は現状では天井部がない。SB04のカマドはそれらとはやや異なり、住居跡の東辺に付設されており、構築法も壁溝を粘土で埋めて窓体部を造ったものである。しかも煙道部の痕跡が住居跡外になく、どのような方法で煙を出していたのかわからないが、板や石等で囲って煙出し状のものを造っていたのかもしれない。炉跡とみられるのはSB26等より検出され、住居跡のほぼ中央に位置し、カマドとの機能分化を行っていたものと思われる。住居の入口は構造等よりSB03・05・07・19・26が南側で、SB04が西側であ

ろう。このように、ほぼ定型化した住居が構築されたようであるが、住居間でプラン・規模・内容等、差異を認めることができる。

2グループは1グループと同様な平面プラン等をとるものも多いが、やや簡単な構造のものを主体とする。これらのものとしては帶状に重複していたSB09~14・21、2個ずつ並んでいたSB06・32とSB30・31、単独のSB27とSB28が存在する。平面プランはコの字状や隅丸コの字状であるが、やや不整形で、床面は一定でないものもある。規模は3~6mで1グループと大差ない。溝を持つもの（SB11・12・14・21・32）や柱穴をもつもの（SB06）もあるが、全般的に粗雑である。カマド・炉跡は存在しない。須恵器を中心に土師器・砥石が多く出土している。作業に関係した遺構と思われ、一部には住居にされたものもあるかもしれない。1と2の違いが、機能差によるものなのか、階層差によるものなのか、今後検討を要する問題である。

3グループは掘立柱建物跡である。その代表例としてSB17があげられるほか、SB41がある。SB17は2間×2間ないし2間×3間のもので、柱穴も大型で、幅広い溝を伴なっている。床面積は16.3m²と、小型の竪穴式住居跡よりやや大きいもので、住居・倉庫等が想定できる。鳥取県青木遺跡では12m²以下を倉庫に、12m²以上を住居に考えられており、それに従うならば、住居の可能性もある。カマド・炉跡は存在せず、この点住居としたが、疑問の残る点である。

次に集落の構造について考えてみることにする。

「住まい」は1グループと2・3グループの一部が当たり竪穴式住居跡と掘立柱建物跡の両方が存在したことになる。まず竪穴式住居跡は斜面上方に土止め溝を伴なう大型住居（SB19）を中心にL字状に配置されている。住居跡間の距離はSB03とSB19との間がやや離れているが、他は2~3mほどで一定している。重複がほとんどなく、SB19より順次造られたものと思われる。掘立柱建物跡であるSB17は住居群より離れた場所に存在しており、竪穴式住居跡群の居住者とは一線を画するものようである。

「仕事」に関するものは2グループであり住まいの南側に配置され、仕事場・工房跡・納屋・家畜小屋等に使われたものと思われる。中央部のものは東西に細長く重複し、短期間に建て替えが数多く行われたものと思われる。南半のものは2軒ずつ対になったものが2例あり、その一方ずつからミニチュア製品が1点ずつ出土しており、仕事と祭祀が関連して行われたことも考えられる。特に床面より須恵器が多数出土しており生業と関連して興味深い。砥石が2グループからしか出土をみないことも示唆的である。この種は簡単な小屋掛け程度のものが多くたと思われる。

「倉」は明確なものがないが、SB40がそれに当たるのかもしれない。SB17は現段階では住居としているが、松ヶ迫遺跡で指摘されたように、倉庫であった可能性もある。北半の未発掘区に存在したことも考えられ、元来、多く倉庫があったのかもしれない。

集落は四分割でき北半が住居（北西半は竪穴式住居跡、北東半は掘立柱建物跡）に、南西半

が作業場に、南東半は空地で広場とも考えられるものである。倉庫を明確にできなかつたが、集落内は階層差や機能によって土地割がきびしく貫徹されており、共同体内の規制のきびしさを感じさせるものである。また当時の住居単位は10軒を越えないものようである。

その当時の道を復元すると痕跡はないもののSB07・05・19・03の南側に東西に存在していたものと思われる。この道は西方は川に沿って平地に向かい、東方はSB17の南側に達しているものである。またSB11・21やSB09・10・13・14等の造構の北辺がほぼ一致しているが、これはその道の造成の下端を示していたのかもしれない。またこの道にはSB03とSB19の間からSB04の西側を通りSB26の南側に達する道やSB07付近より南方にSB06やSB32に達する道などが連結していたものであろう。

集落と墓地との関係であるが、調査区内に隅丸長方形のプランの土塀(SK01・02・08)があり、これらは遺物がなく性格がはっきりしないが、小児墓とも考えられるもので、集落の縁辺部に位置し、松ヶ迫B地点遺跡と同様な有り方を示している。周囲には横穴式石室を内部主体とする西ガガラ古墳が一基あるだけで詳細は不明であるが、元来近くの丘陵に古墳群が造られていたのかもしれない。

集落関係の遺物として須恵器をはじめ土師器・石器・鉄器などが出土して、年代決定の決め手となるほか、当時の生活を知る上で貴重な資料である。

住居跡建物跡出土の須恵器は壺蓋・壺身・高壺の特徴から陶邑⁽³⁾でいえば、II期5前後で、6世紀後半代のものと思われる。本集落は他の時期のものが出土しないので、ほぼこの時期に構築され、短期間のうちに廃絶されたものと思われる。なお土師器は須恵器に比べ、器種構成、数量とも貧弱でその内容はあまりはっきりしなかった。

砥石は2グループとした作業場より出土している。これらの砥石は鉄製品の底に使用されたものと思われ、本調査では鉄製品が1点しか出土していないが、案外、多くの鉄製品が使われたものと思われる。

鉄製の摘鎌がSB26より出土している。松ヶ迫遺跡群等より出土しており、稻の穂刈を示唆する貴重な資料である。

集落の立地をみると、丘陵の尾根の南斜面に位置し、小河川に近く住みやすい所であったのかもしれないが、水田可耕地は本遺跡よりもっと下流や尾根の北側の下見地区にあり、畑作や他の生業を生産基盤の主体に置いていたことを想定したほうがいいのかもしれない。このことを示唆してくれるものに須恵器が上げられる。本遺跡内より須恵器が土師器などに比べ、圧倒的に多く出土し、特に作業場とした造構の床面上に多く見られた。なおかつ、本遺跡の東方300mの中郷線の道路予定地工事現場より、須恵器が多數表採され、窯跡であった可能性もある。このようなことから本集落が窯業に関連した集落によって造られたことも考えられ、単に水田耕作や畑作だけを営んでいたのではないと思われる。

広島県の古墳時代の集落遺跡の発掘例が、最近増えているが、集落全体を発掘したものは少

なく、今回の発掘調査によって、その構造や内容を知る上で貴重な資料を得ることができた。昭和53年度に行われた松ヶ迫遺跡群の発掘調査では4地点で197軒の6世紀前半代～8世紀代に及ぶ集落跡が明らかになっている。本遺跡はその松ヶ迫遺跡群と立地や構成とも類似点が多く、山間地域における特徴がよく表われているものと思われる。特に本遺跡が、6世紀後半代に構築され、短い期間に廃絶された原因を考えると、松ヶ迫遺跡群でもA地点→B地点→F地点の移動が考えられており、今後、追求する必要があろう。

今回の調査が西条盆地では初めての本格的な集落遺跡の調査となった。これを通し、集落の構造などの一部を理解することができたが、当時の村人の生活を復元することは、単に住んでいた場所だけでなく、周囲を含んだ広い生活環境の中で理解しなければならない。

註

- (1) 広島県教育委員会・隣広島県埋蔵文化財調査センター「松ヶ迫遺跡群発掘調査報告」1981
- (2) 鳥取県教育委員会「背木遺跡発掘調査報告書！」1976
- (3) 大阪府教育委員会「陶邑」I～IV 大阪府文化財調査報告書28～31 1976～1979

図版 1

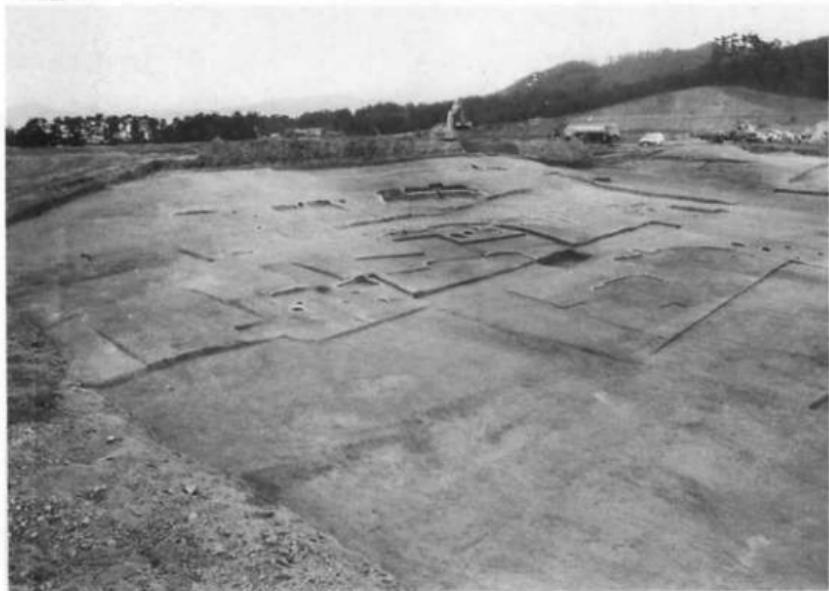


遠 景 (西より)



遠 景 (南東より)

図版 2



調査後全景(南より)



調査後全景(南東より)

図版 3



調査後全景(東より)

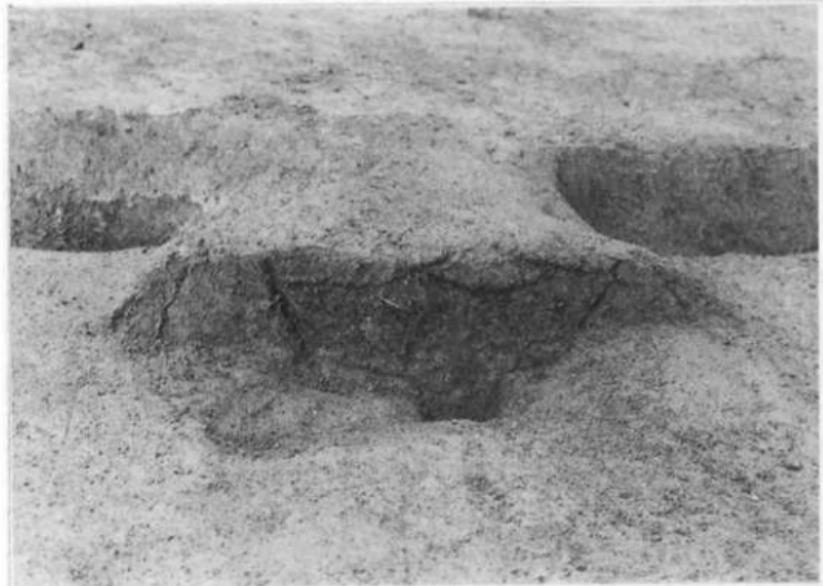


S B 0 3 (南より)

図版 4



S B 0 4 (西より)



S B 0 4 かまど断面(西より)

図版 5

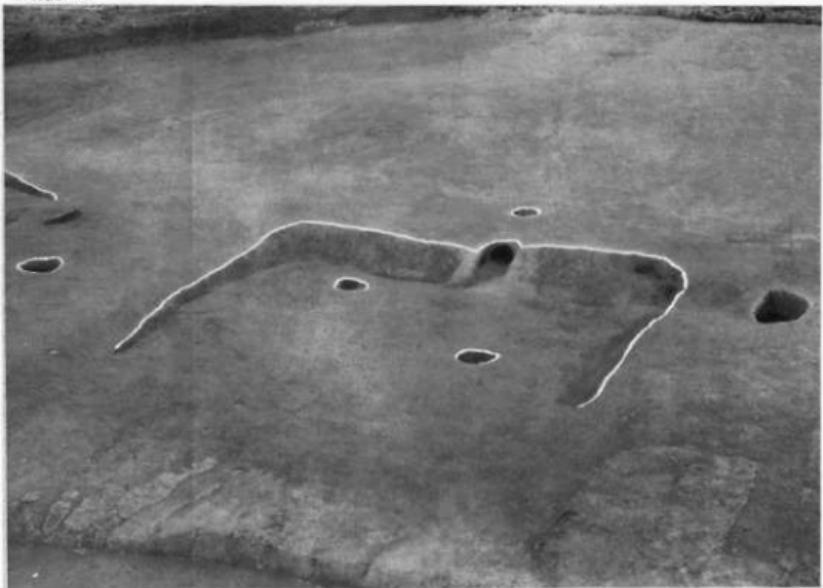


S B 0 5 (西より)

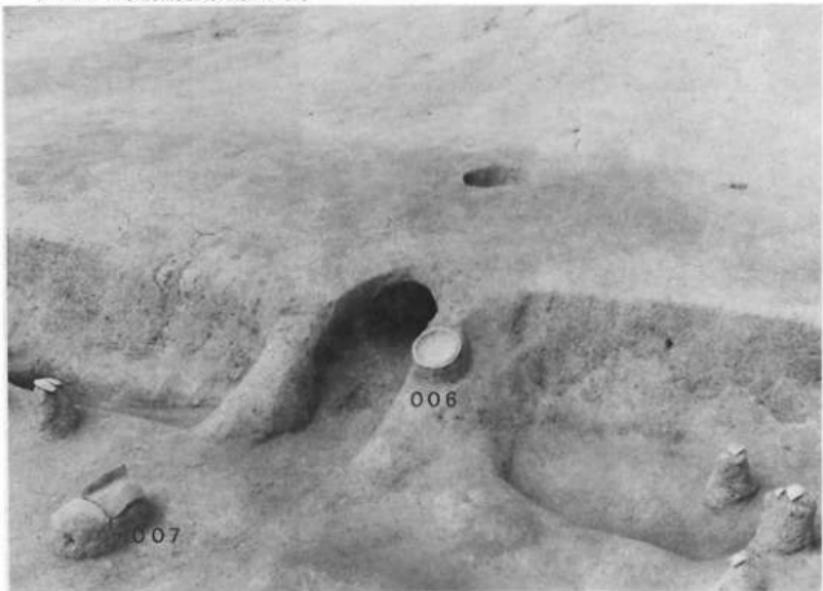


S B 0 5 (南東より)

図版 6

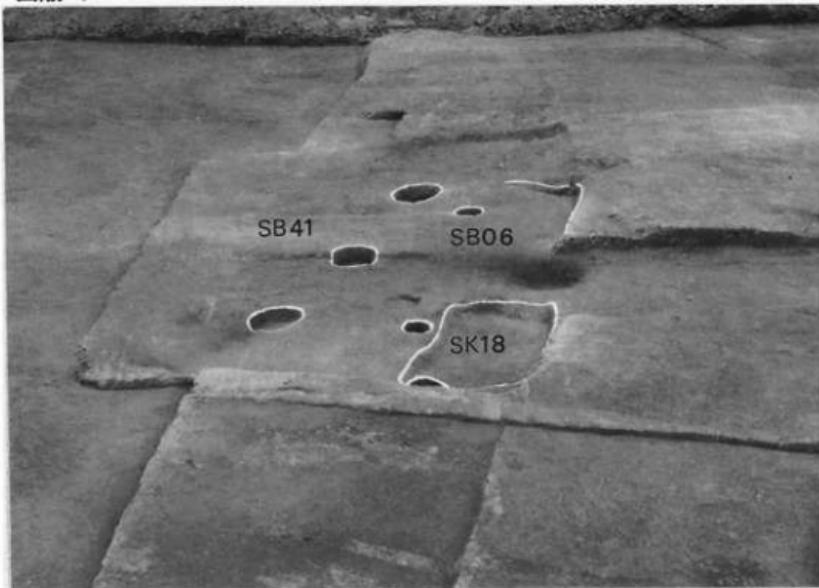


S B 0 5 完掘後(南東より)



S B 0 5 かまど(南東より)

図版 7



SB06・41, SK18(北東より)

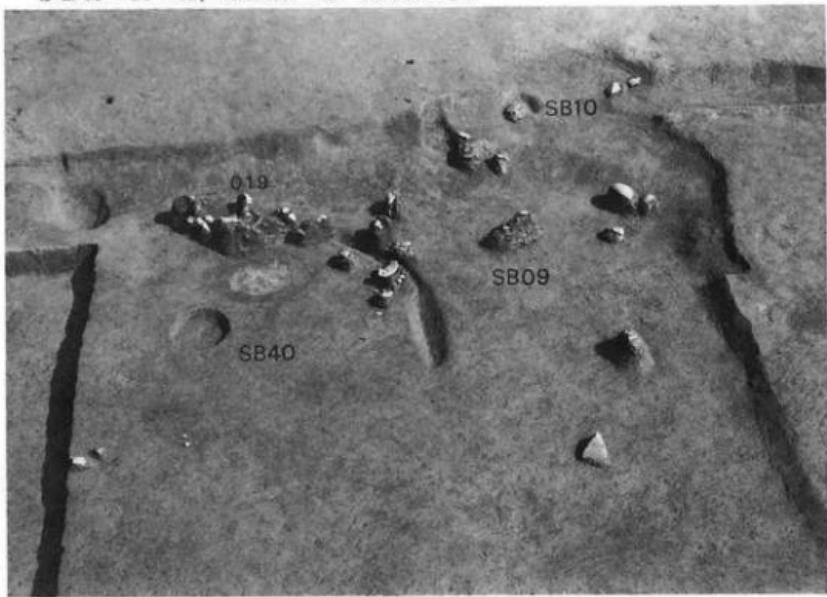


SB07(南東より)

図版 8

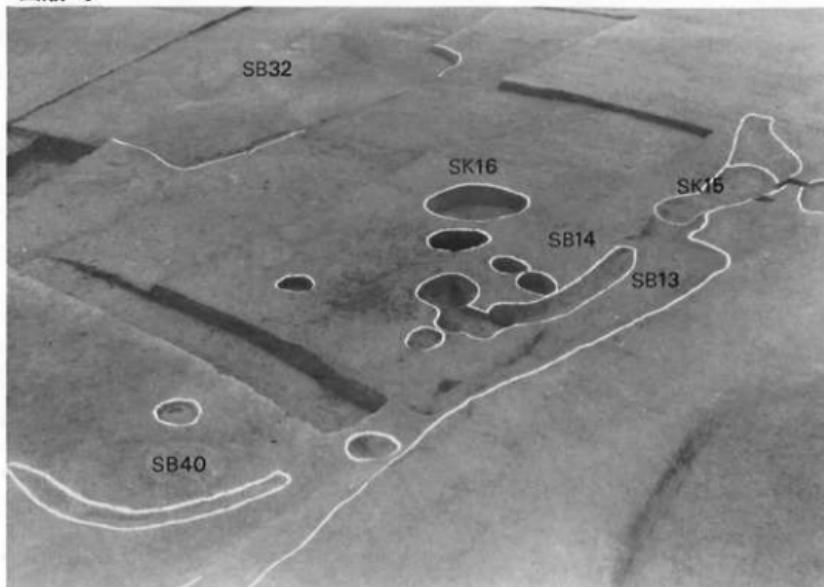


S B09~14・40, S K15・16・25(東より)



S B09・10・40(南より)

図版 9



S B 13・14・32・40, S K 15・16(北東より)



S B 21, S K 20・22～24(北東より)

図版 10



S B17・28・29(南西より)



S B17・28・29(南東より)

図版 11

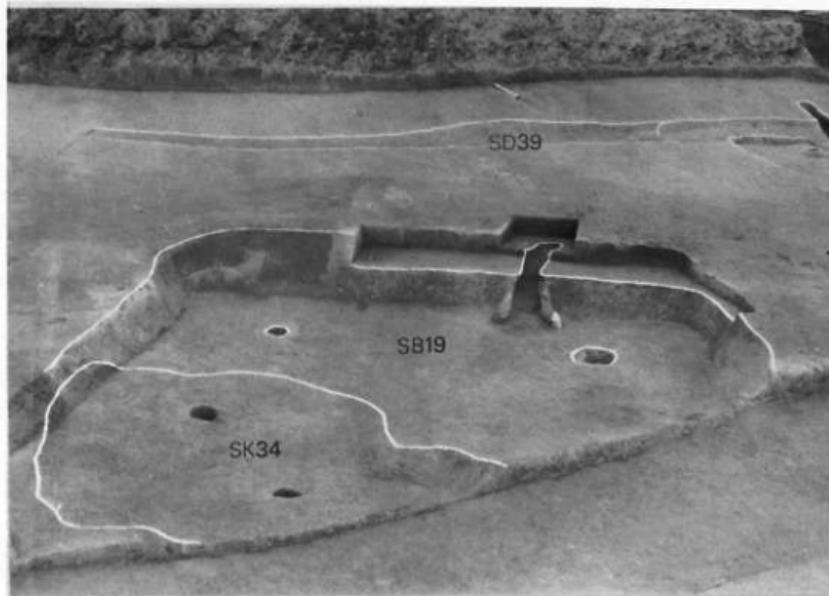


S B17・29断面(東より)



S B17断面(西より)

図版 12

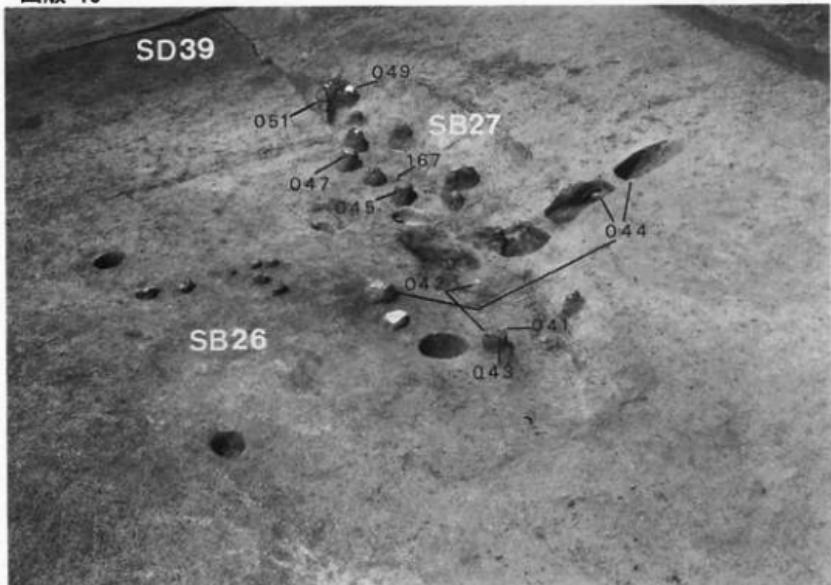


S B19, S K34, S D39(南より)

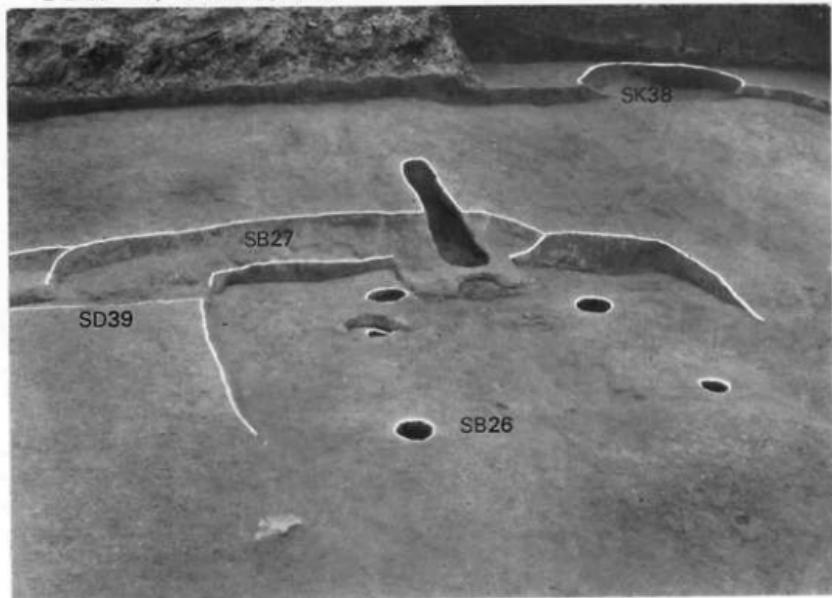


S B19かまど断面(南より)

図版 13

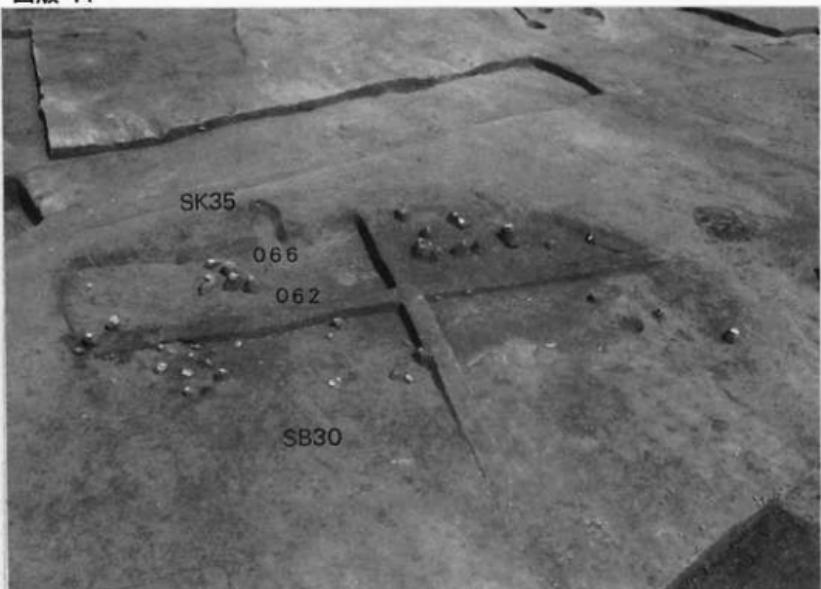


S B26・27, S D39(東より)

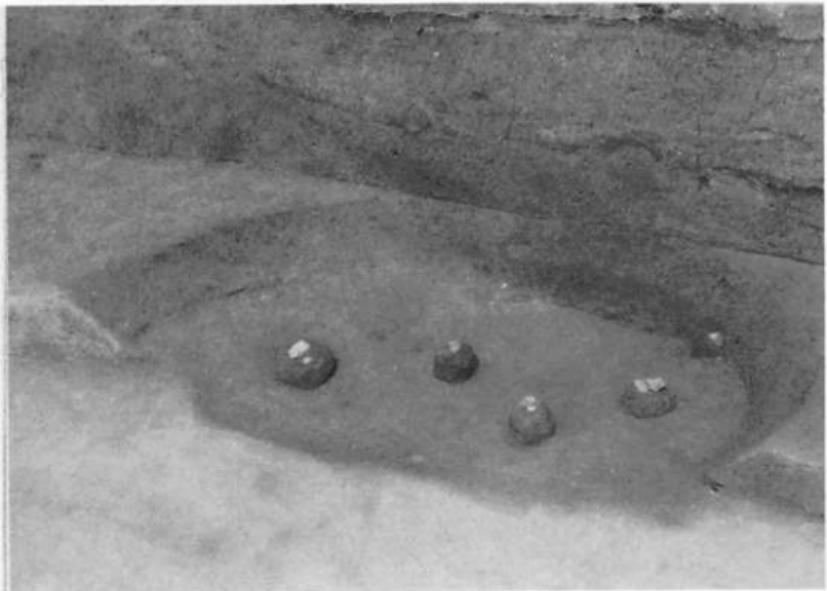


S B26・27, S K38, S D39(南より)

図版 14

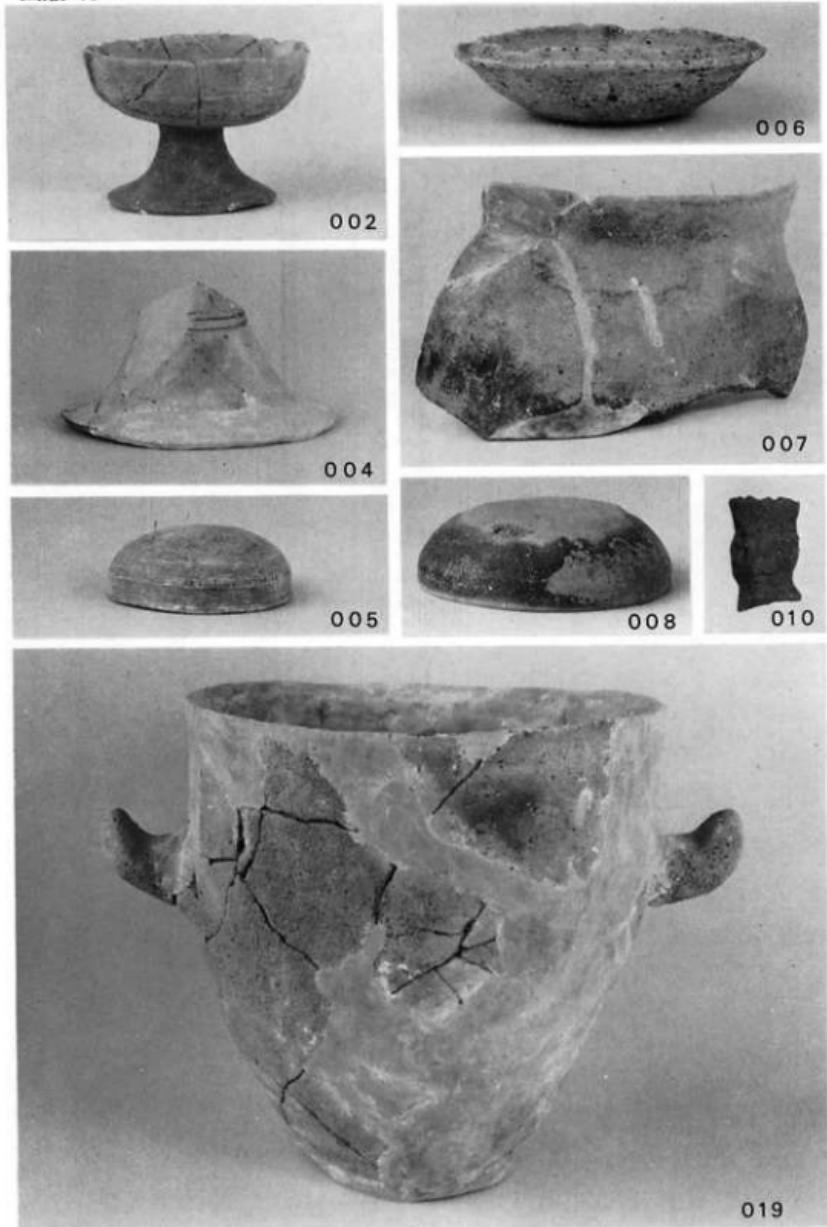


S B 30, S K 35(南より)



S K 38 (南より)

図版 15



出土遺物 I

図版 16



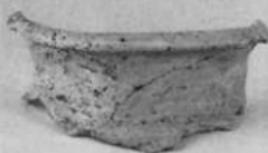
023



026



025



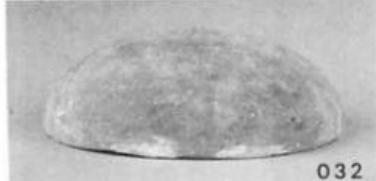
027



028



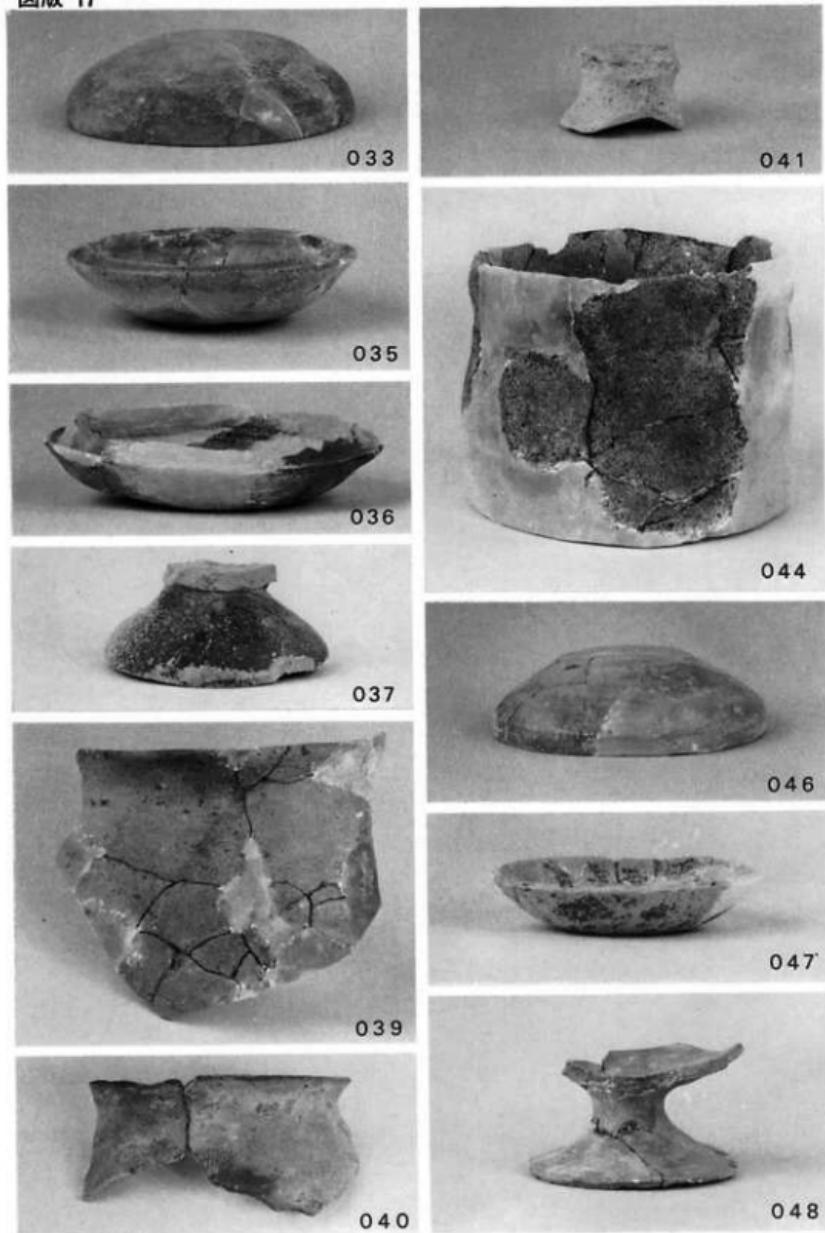
030



032

出土 遺物 II

図版 17

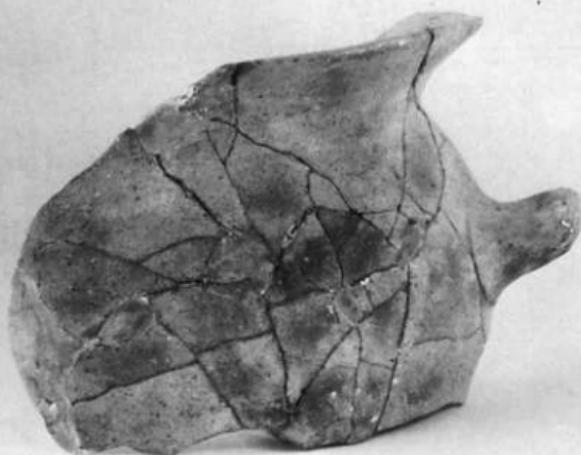


出土遺物 III

図版 18



049



051



057



062



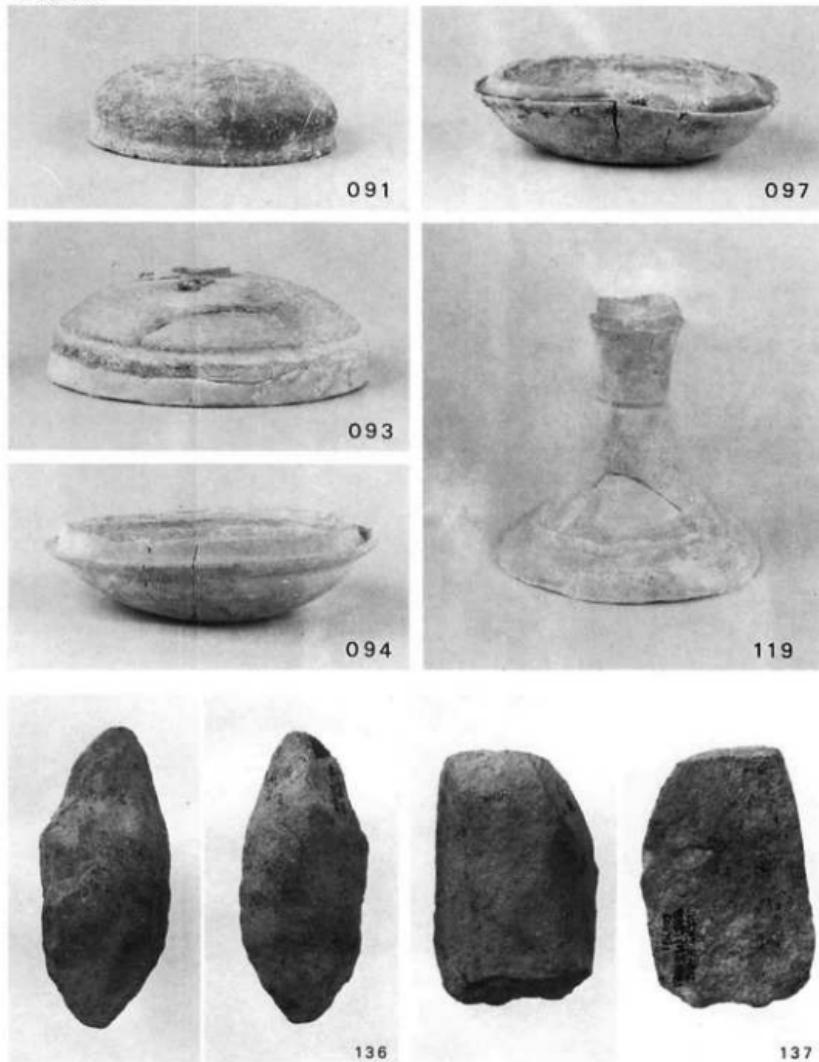
072

出土遺物 IV

図版 19

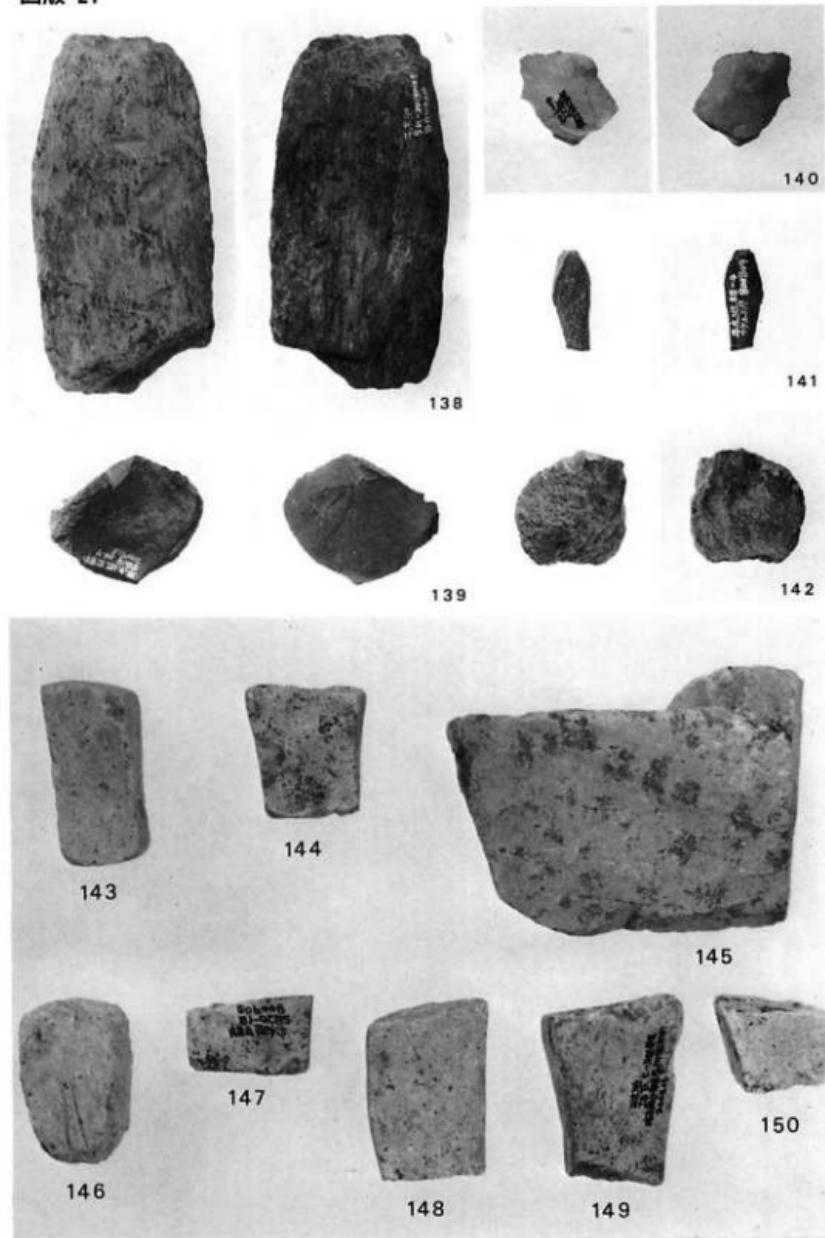


图版 20

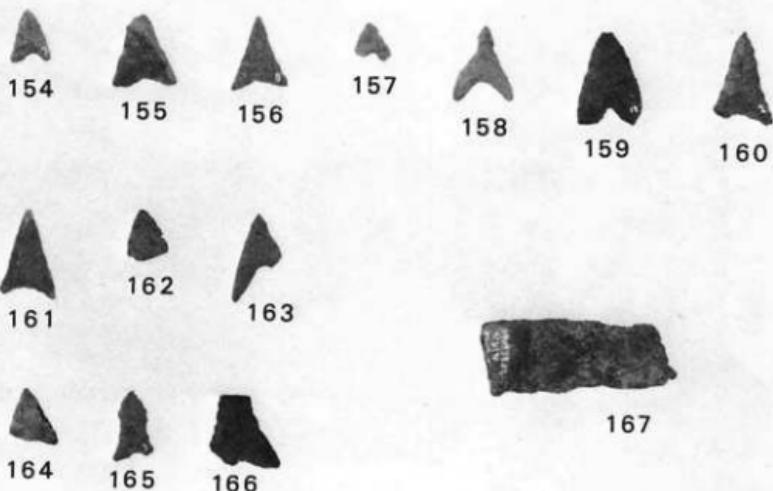
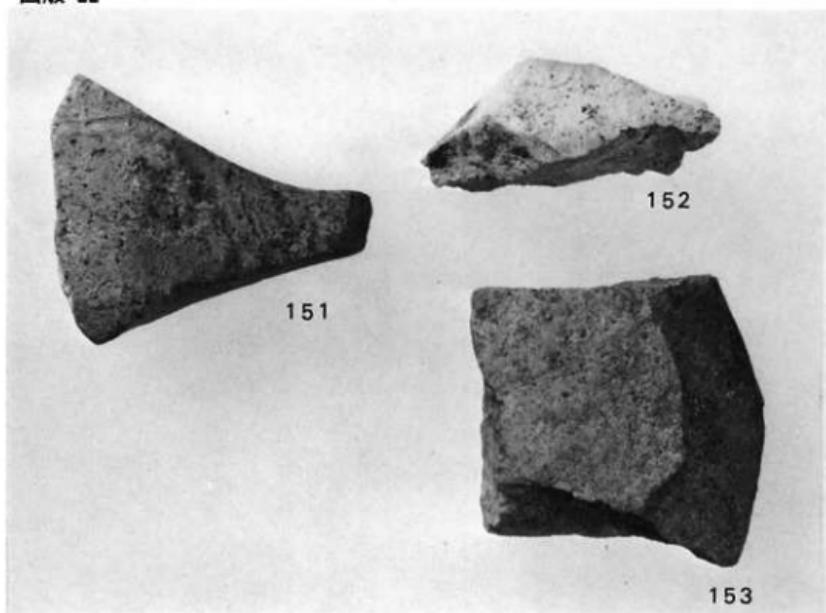


出土 遺物 VI

図版 21



図版 22



出土 遺物 VIII

平木池遺跡発掘調査報告

1982年1月

広島県教育委員会

編集・発行 (財)広島県埋蔵文化財調査センター

印刷至誠堂印刷株式会社